長崎県文化財調査報告書第139集

石　田　城　跡

――県立五島高等学校建替工事に伴う緊急発掘調査報告書――

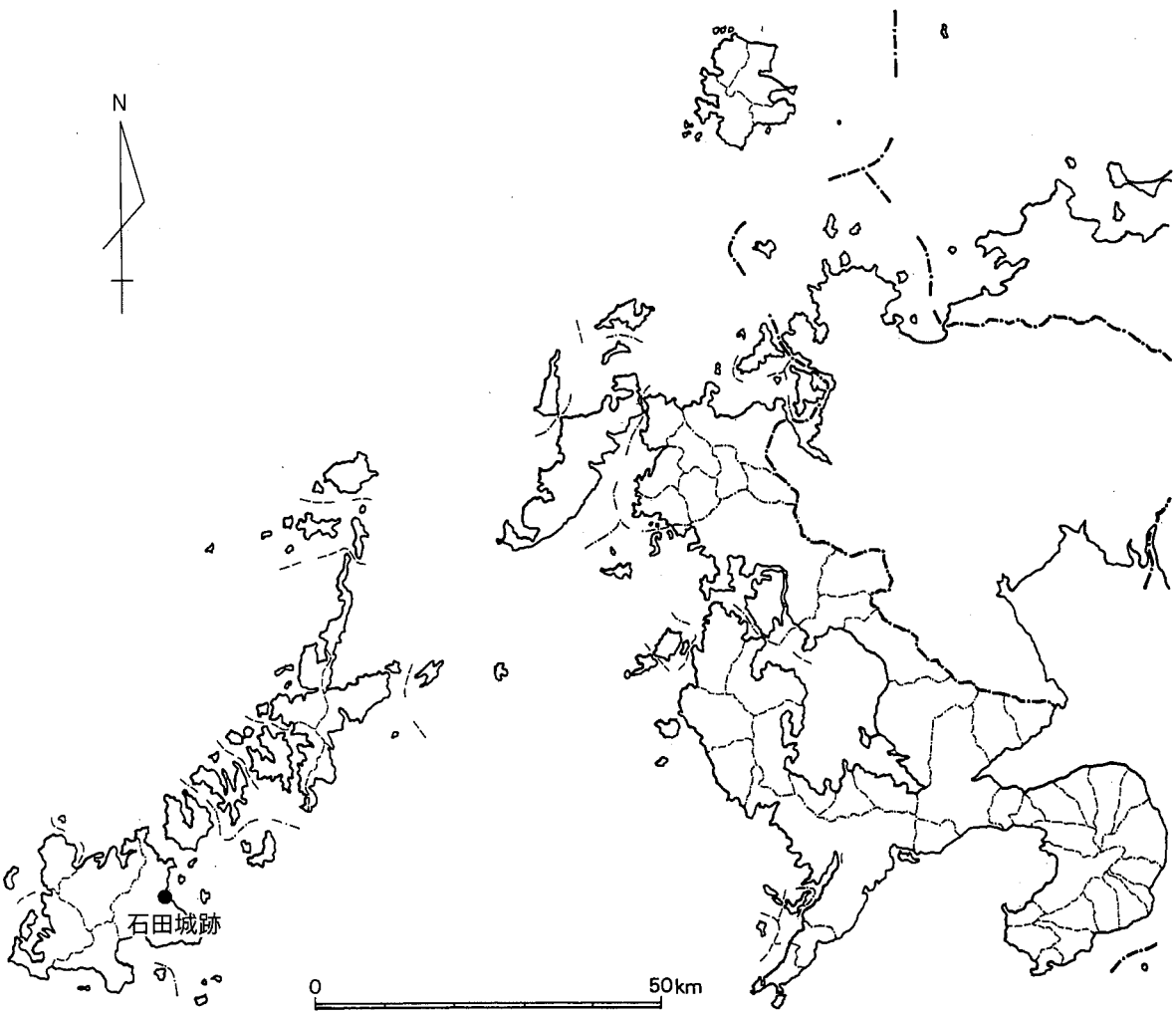
1997

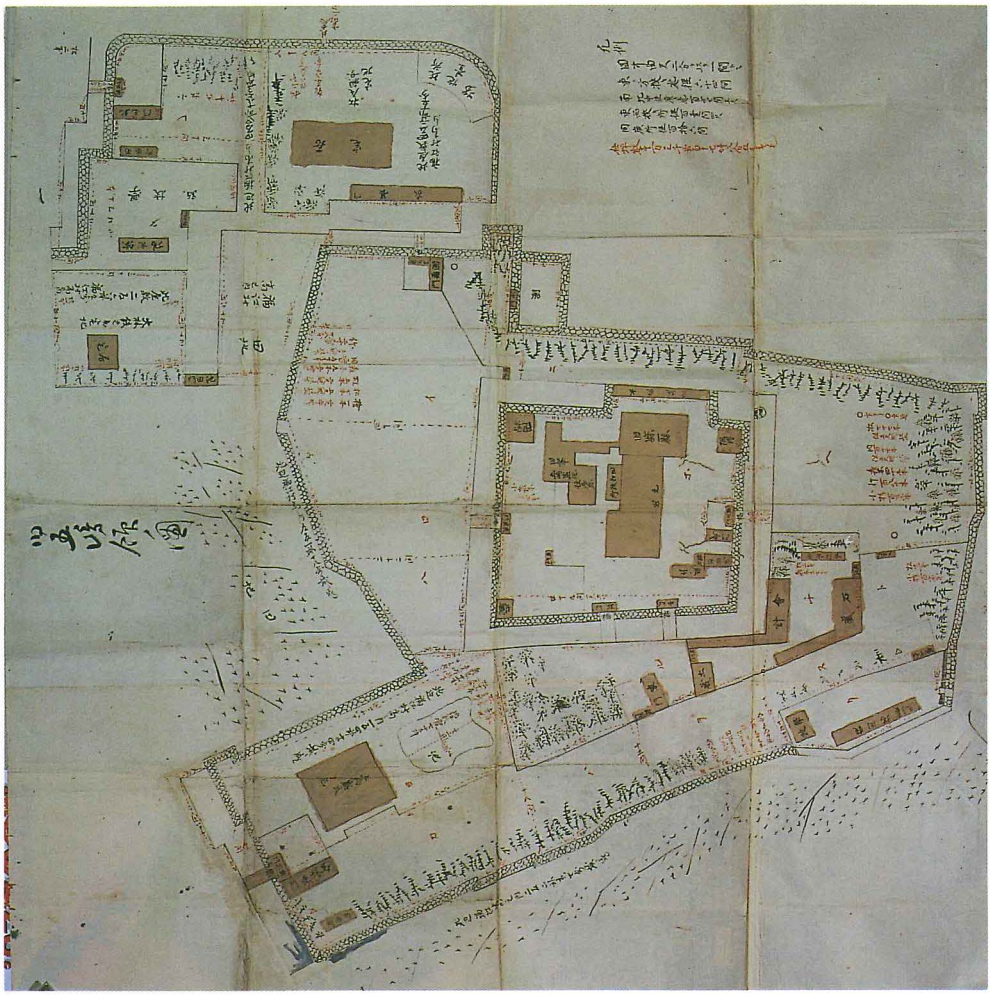
長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書第139集

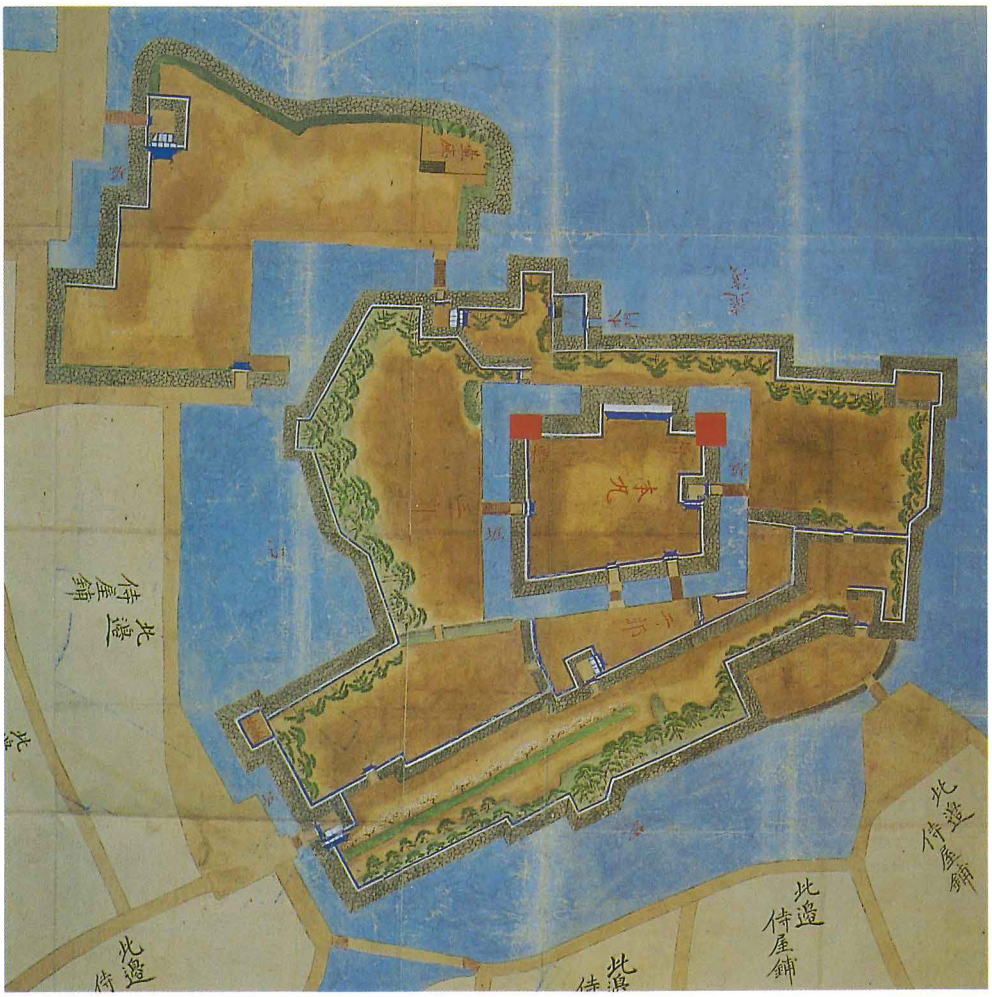
石　田　城　跡

――県立五島高等学校建替工事に伴う緊急発掘調査報告書――





『旧五嶋領ノ図』



『肥前國松浦郡五島福江城絵図面』

発刊にあたって

本書は，長崎県教育委員会が県立五島高等学校の建て替えに伴い実施した，石田城跡の発掘調査報告書です。

石田城は文久３年（1863）に五島氏の居城として築城された，日本で最後に完成した城です。その後，五島氏の意向もあり教育施設として利用されることとなり，明治33年（1900）に長崎県立五島中学校が開校し，現在の県立五島高等学校に至っています。現在の校舎は，本館が昭和９年に，新館が昭和39年に，衛生看護棟が昭和49年に建設されたものであり，老朽化も進んだため開校100周年を機に新校舎の建設がなされることとなったわけです。

今回の発掘調査により，五島焼や波佐見焼の碗や小皿，五島家紋所入りの瓦，寛永通宝など当時のようすを忍ばせる遺物が出土し，柱跡の残る礎石などの遺構が確認され，近世末の遺跡の貴重な資料を得ることができました。

最後に，この報告書が文化財に対する理解と愛護を深める一助となり，学術研究の資料として役立つことを念じて発刊のあいさつとさせていただきます。

平成９年３月31日

長崎県教育委員会教育長　中　川　　忠

例　　言

1．本書は，福江市福江町に所在する石田城跡の，県立五島高等学校建替工事に伴う範囲確認調査及び緊急発掘調査の報告書である。

2．調査は，長崎県教育庁財務課の依頼を受け，教育庁文化課が担当した。

3．発掘調査の担当は以下のとおりである。

範囲確認調査

長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	村川　逸朗
	文化財調査員	塩塚　浩一

緊急発掘調査

長崎県教育庁文化課	埋蔵文化財班係長	藤田　和裕
	文化財保護主事	甲斐田　彰

4．本書は分担執筆され，各項の執筆者は本文目次に記した。

5．本書関係の写真撮影は，範囲確認調査分は村川が，緊急発掘調査分の調査中については藤田が，遺物については甲斐田・新野が担当した。

6．近世陶磁器については，下川達彌文化課課長補佐の御教授を受けた。

7．本書関係の出土遺物と図面および写真類は，長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。

8．本書の編集は甲斐田による。

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1　（藤　田）

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2

1．地理的環境 …… 2　（甲斐田）

2．〈環シナ海地域〉の歴史的環境の中で…… 6　（村　川）

Ⅲ　調　査……14

1．範囲確認調査……14　（村　川）

(1)　調査概要……14

(2)　土層……14

(3)　遺構……14

(4)　出土遺物……19

(5)　まとめ……23

2．緊急発掘調査……24　（甲斐田）

(1)　調査概要……24

(2)　土層……24

(3)　トレンチごとの遺構残存状況……26

(4)　出土遺物……29

Ⅳ　まとめ……36　（甲斐田）

挿　図　目　次

第１図　福江市遺跡位置図〔Ｓ＝１/75,000〕…… 3
第２図　遺跡周辺図〔Ｓ＝１/7,500〕 …… 5
第３図　試掘坑配置図及び新旧建物配置図〔Ｓ＝１/1,500〕……15
第４図　範囲確認調査土層及び遺構図（ＴＰ１・14）〔Ｓ＝１/80〕……16
第５図　範囲確認調査遺構図（ＴＰ４・５・８・９・15）〔Ｓ＝１/100〕 ……17・18
第６図　範囲確認調査出土遺物①〔Ｓ＝１/３〕 ……20
第７図　範囲確認調査出土遺物②〔Ｓ＝１/３〕 ……21
第８図　範囲確認調査出土遺物③〔Ｓ＝１/３，Ｓ＝１/２〕……22
第９図　緊急発掘調査土層図（第２トレンチ東北壁）〔Ｓ＝１/25〕……24
第10図　緊急発掘調査区位置図〔Ｓ＝１/500〕……25
第11図　緊急発掘調査遺構図①〔Ｓ＝１/100〕……26
第12図　緊急発掘調査遺構図②〔Ｓ＝１/100〕……27
第13図　緊急発掘調査遺構図③〔Ｓ＝１/100〕……27
第14図　緊急発掘調査遺構図④〔Ｓ＝１/100〕……28
第15図　緊急発掘調査遺構図⑤〔Ｓ＝１/100〕……28
第16図　緊急発掘調査出土遺物①（国産陶磁器）〔Ｓ＝１/３〕……30
第17図　緊急発掘調査出土遺物②（輸入陶磁器）〔Ｓ＝１/３〕……31
第18図　緊急発掘調査出土遺物③（土器）〔Ｓ＝１/３〕……32
第19図　緊急発掘調査出土遺物④（瓦）〔Ｓ＝１/３〕……33
第20図　緊急発掘調査出土遺物⑤（古銭）〔Ｓ＝１/１〕……34

表　目　次

第１表　福江市遺跡地名表 …… 4
第２表　「風説袋」（青方文書）所収の主要海外情報一覧 …… 8
第３表　紀年銘・形態による製作年代分類表 …… 11
第４表　出土古銭一覧表……34
第５表　幕末略年表……37

図　版　目　次

図版１　石田城近景……41
図版２　石田城跡遠景等……42
図版３　範囲確認調査状況①……43
図版４　範囲確認調査状況②……44
図版５　範囲確認調査状況③……45
図版６　範囲確認調査状況④……46
図版７　範囲確認調査出土遺物①……47
図版８　範囲確認調査出土遺物②……48
図版９　緊急発掘調査状況①……49
図版10　緊急発掘調査状況②……50
図版11　緊急発掘調査状況③……51
図版12　緊急発掘調査状況④……52
図版13　緊急発掘調査出土遺物①……53
図版14　緊急発掘調査出土遺物②……54
図版15　緊急発掘調査出土遺物③……55

Ⅰ　調査に至る経緯

石田城は，幕末の文久３年（1863）に完成した日本で最も新しい城である。「本丸・二の丸よりなり，これに内堀・外堀がめぐらされている。築城が海防を目的としているところから，石火矢台場が各郭の隅の要所要所に配置されているのが特徴」とされている。城が完成して５年後に明治維新を迎え，明治５年（1872）に城は陸軍省の所管となり，やがて楼門の一部を残して建物部分が解体され，長崎方面に送り出された。本丸跡には，明治33年（1900）に長崎県立五島中学校が開校し，学制改革により昭和23年（1948）に長崎県立五島高等学校として現在に至っている。

昭和９年に建てられた本館の老朽化も進み，新校舎の建築が計画された。平成８年度に校舎を解体し，平成９年度から10年度で新校舎を建築して，開校100周年を迎える平成12年(2000)までに体育館・プール・グランドなどの諸施設の整備が終わる予定である。

計画の立案とともに，平成６年度から県立高校施設担当の教育庁財務課と文化課の間で，文化財としての石田城の調査について協議が行われ，範囲確認調査は県文化課で実施することとなった。

平成７年度にも，５月以降，五島高校改築に伴う文化財調査の問題点など，数回の話し合いをもった。また，地元関係者（福江市・福江市教育委員会・商工会議所・青年会議所・観光協会・文化協会・五島支庁・同窓会・ＰＴＡ）および県関係者（財務課・建築課・文化課・五島高校）による，県立五島高校施設整備懇親会も開かれ，①五島高校の施設整備の将来計画について，②周辺環境に調和した校舎整備のあり方ついて，③周辺文化財の保護・活用について，等の意見交換が行われた。

この後も，工事側と文化財側との間に協議が行われ，工事側から

・仮設校舎建設予定地の第一グランド（二の丸跡）の試掘調査を早急に実施してほしい。

・本丸跡の調査もできる所から着手してほしい。

・本丸跡への工事用の進入路部分の取り扱いについては，石垣などに手を加えない方法など慎重に計画して，通路を確保するつもりであるが，文化課の調査では是非協力してほしい。

・高校の本館等の解体工事中に立会，または試掘調査ができないか。

などの要望が出された。

これらを受けて文化課としては，「二の丸跡の調査にはかかれるが，本丸跡は現在校舎が建っている場所が中心で，その周辺も舗装された通路などとなっており，二の丸跡との同時の調査はむずかしく時期的に分けて実施したい。」と回答した。

平成７年５月から７月にかけて，第一グランドを中心とした二の丸跡と本丸の一部の発掘調査が行われた。この調査の結果，二の丸東側の石垣に接する別の石垣や荷上門跡などが見つかっている。そして今回，新校舎建築のため本丸部分の発掘可能な場所を，高校の夏休みの時期にあわせて７月から８月にかけて実施することになった。（藤田）

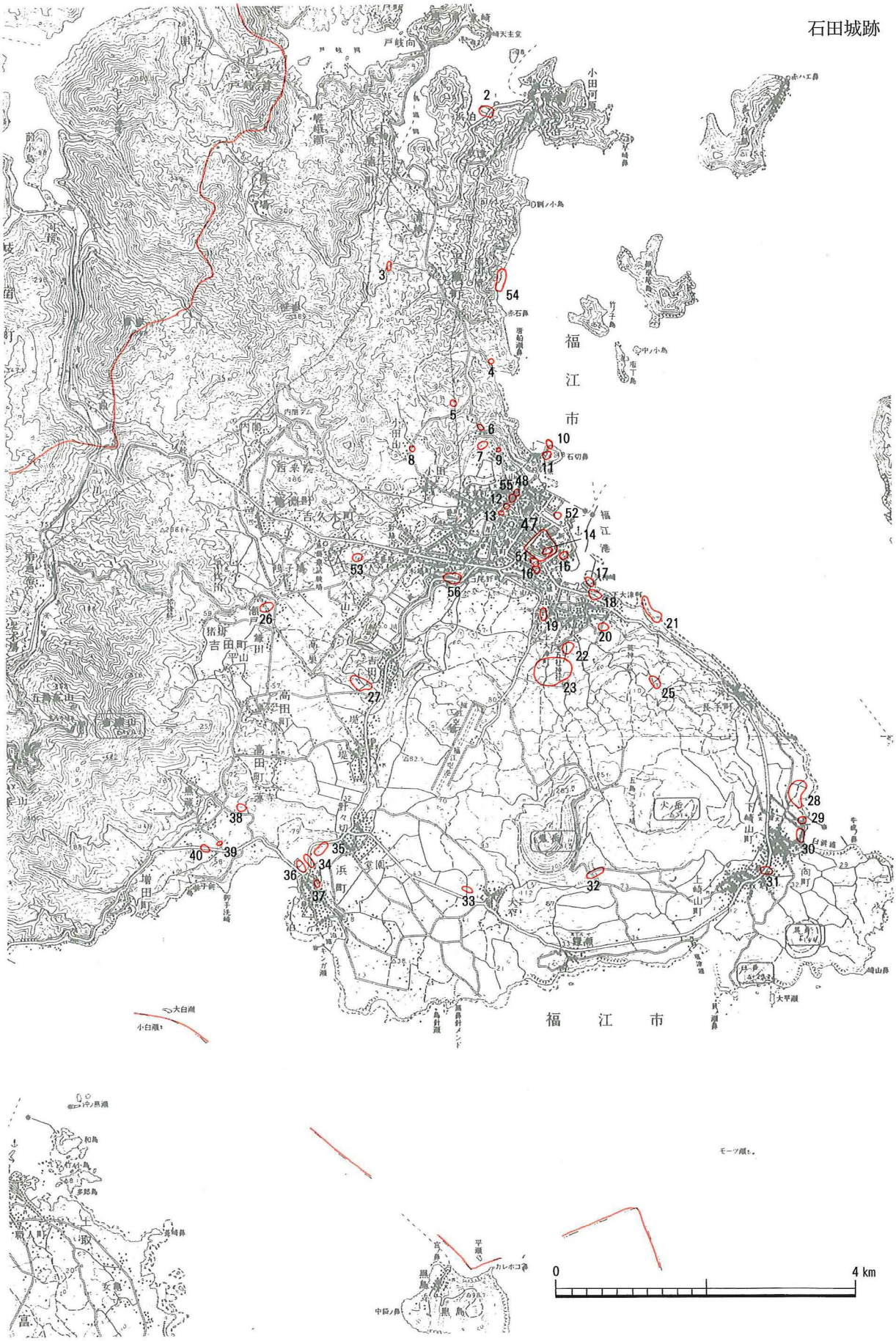
註１　1980『日本城郭大系　第17巻　長崎・佐賀』新人物往来社

II　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

五島列島は長崎県本土の西約100kmに位置し，北東から南西に約150kmにわたって連なっており，福江島・久賀島・奈留島・若松島・中通島の五島の他に北には小値賀島・宇久島，東には崎戸町の平島・江ノ島，さらに福江島より南西約60kmの東シナ海上には男女群島と，総数141の大小の島からなっている（常住島は30)。行政的には平島・江ノ島を除き１市12町からなり，面積は685㎢（Ｈ７．10．１）で県全体の16.7％を占めるが，人口は88,630人（Ｈ８．10．１）で県全体の5.7％で，人口密度は県平均の３分の１ということになる。地形的には，福江島の父ヶ岳（460.8m）を最高峰とし，福江島に４峰，中通島に４峰の400m級の山がある程度で高い山はないが，山が海岸部まで迫っているため平坦地に乏しい。海岸は無数の入江をなし，入江の奥のわずかな沖積低地に集落が形成されているパターンが多くみられる。また，五島の海岸地形の特徴は海食地形にある。風波や沿岸流によって形成された海食崖や海食洞は特に西海岸に発達している。気候は対馬暖流の影響で冬は暖かく夏は比較的涼しい海洋性気候である。降水量は年間2,000㎜を越え全国的にも多い方であるが，河川の多くが急で短いため，干ばつの記録も多く梅雨や台風による降水量が少ないときは，農作物への影響は大きくなる。台風の影響を受けることも多く，九州の西端に位置するため７月から接近するものもあり，さらに８・９月は東側を北上するものが多くなるため被害が大きくなりやすい。自然の景観はすばらしいところが多く，特に玉之浦湾・若松瀬戸は景勝地として知られ，福江島のアスピーテ・ホマーテは日本でも数少ない火山の学術的資料としても貴重であり，昭和30年には西海国立公園に指定されている。産業でみると周囲が海に囲まれていることもあり漁業の果たす役割が大きく，漁業経営体数は3,252体（Ｈ７）で県全体の22.7％を，海面漁業漁獲量は174,355ｔ（Ｈ７）で県全体の34.5％を占めている。

遺跡の所在する福江市は，福江島の東部と，椛島・久賀島など10以上の常住・無人の島からなる。五島列島の中心都市で面積は158㎢（Ｈ７．10．１），人口は28,712人（Ｈ８．10．１）である。福江市の西方は福江島東部山地を境として北部が岐宿町，南部が富江町に接し，北方は奈留瀬戸を隔てて奈留町となる。市域の北部から西部にかけては市の最高峰の翁頭山(429.3m)をはじめ中起伏山地(福江東部山地）が連なる。福江島北部の海岸線は岬や入江等の屈曲にとみ，戸岐・奥浦の両湾は典型的なリアス式海岸で溺れ谷が発達している。南部は鬼岳・火岳・中岳のホマーテの一群と箕岳・臼岳のホマーテの一群からなる鬼岳火山群となっている。また，その周囲は溶岩台地が緩やかなスロープ状の丘陵を形成している。その西部の大浜地区には大浜・香珠子浜といった福江市では数少ない砂浜海岸が広がっている。福江島東部山地と鬼岳火山群の中間には，両者の山間部に源を発する福江川が流れ，この流域の平野は肥沃な農地を形成している。福江川は東北方向へ流れ福江港に至るが，河口の平野部及び埋立地は，住宅が集中し，市役所・官庁・商店街などがあり福江市の中心地となっている。福江島の北にある久賀島はＵ字形をした島で，中央に久賀湾を抱いてＵ字状に中起伏山地が連なる。海岸部の多くは出入りの激しいリアス式海岸だが，久賀湾の付け根の部分にわずかな沖積低地がみられる。



第１図　福江市遺跡位置図〔Ｓ＝１/75,000〕

石田城跡

第１表　福江市遺跡地名表

1	堂崎遺跡	遺物包含地	縄・弥	30	白浜貝塚	遺物包含地	縄・弥
2	浜泊遺跡	遺物包含地	縄　文	31	向郷遺跡	遺物包含地	不　明
3	奥の木場道遺跡	遺物包含地	縄　文	32	皆塚遺跡	遺物包含地	弥　生
4	六方遺跡	遺物包含地	縄　文	33	野々切遺跡	遺物包含地	不　明
5	潮満越遺跡	遺物包含地	縄　文	34	中島遺跡	遺物包含地	縄・弥
6	曲坂遺跡	遺物包含地	縄　文	35	元享寺遺跡	遺物包含地	縄・中
7	松坂遺跡	遺物包含地	旧・縄	36	大浜遺跡	遺物包含地	縄～中
8	下屋敷遺跡	遺物包含地	縄　文	37	堂園遺跡	遺物包含地	縄・弥
9	北松山遺跡	遺物包含地	縄　文	38	浜野西野遺跡	遺物包含地	旧・縄
10	戸楽Ａ遺跡	遺物包含地	不　明	39	外輪古墳	積石塚	古　墳
11	戸楽Ｂ遺跡	遺物包含地	不　明	40	外輪遺跡	遺物包含地	古　墳
12	宗念寺遺跡	遺物包含地	不　明	41	大開遺跡	遺物包含地	縄　文
13	開田遺跡	遺物包含地	不　明	42	田ノ浦遺跡	遺物包含地	縄　文
14	崎防遺跡	遺物包含地	不　明	43	浜脇遺跡	遺物包含地	縄　文
15	鷲の浦遺跡	遺物包含地	不　明	44	高良遺跡	遺物包含地	縄　文
16	上野町遺跡	遺物包含地	不　明	45	首ノ浦遺跡	遺物包含地	縄　文
17	天神社遺跡	遺物包含地	不　明	46	崎山積石塚	積石塚	古　墳
18	水の窪遺跡	遺物包含地	縄・弥	47	石田城跡	城　跡	近　世
19	住吉神社遺跡	遺物包含地	不　明	48	六角井戸	井　戸	中　世
20	一本木遺跡	遺物包含地	弥　生	49	赤島遺跡	遺物包含地	縄　文
21	江湖貝塚	貝　塚	縄　文	50	泊崎遺跡	遺物包含地	縄　文
22	橘　遺跡	遺物包含地	弥　生	51	福江武家屋敷跡	武家屋敷跡	近　世
23	五社の上遺跡	遺物包含地	旧～古	52	常　灯　鼻	防波堤	近　世
24	荒神社遺跡	墳　墓	不　明	53	荒神岳嘯月園	館　跡	近　世
25	長手遺跡	遺物包含地	旧・縄	54	南河原軽成院跡	寺屋敷跡	近　世
26	瀬戸遺跡	遺物包含地	縄　文	55	明　人　堂	廟　堂	中　世
27	轡口坂遺跡	遺物包含地	旧～古	56	五島家墓地	墓　地	近　世
28	白浜浦遺跡	遺物包含地	縄・弥	57	大板部洞窟遺跡	貝　塚	縄　文
29	崎山渡船場上遺跡	遺物包含地	不　明				

第2図　遺跡周辺図〔S＝1/7,500〕

石田城跡は，福江市東部の市街地の中心部に所在する。福江川の南東側にあたり，溶岩台地の北端より北に約600m，福江港より南西に300mの位置にあり，周囲は小規模な平野となっている。遺跡はもともとは東南北の三方向を海に囲まれ，中心部にわずかなに高まりを持った岬に構築された城であった。現在は周辺は埋め立てられ住宅や商店・発電所など建てられている。

〈参考文献〉

1979『土地分類基本調査　三井楽・福江・玉之浦・男島及女島』長崎県土地対策室
1987『角川地名大辞典　42長崎県』角川書店
1995『長崎県遺跡地図　福江市・南松浦郡地区』長崎県文化財調査報告集
福江市史編集委員会　1995『福江市史』福江市

2．〈環シナ海地域〉の歴史的環境の中で（註１）

(1) 海防のための石田城

石田城本丸の大手門は，東南を向いており，その先には東シナ海が広がっている。一般的な近世城郭であれば大手門の前に広がっているのは城下町であろう。石田城の場合には，城下町は，西から北にかけて拡がっている。昔の城下町と現在の市街地は，ほぼ重なっており，市街地から本丸跡の五島高校に通う高校生は，大手門ではなく『乾の門』と呼ばれる南西の通用門から入っている。恐らく，その昔も似たような状況だったと思われる。

ところが，石田城の特異とも思われる大手門の向きは，その築城の経過からみれば，さしたる不自然さは感じられない。石田城の築城は，異国船防御，つまり外圧への対処を理由としてその築城許可がおりたからである。徳川幕府の「一国一城令」の治世下においては，特例中の特例であり，それだけ徳川幕府の海防に対する危機感が強かったともいえるだろう。この石田城は，海に張り出した海城であり，各郭の隅には西洋流の砲台が設けられ，石垣の上に土塁を設けて胸壁とした。

築城許可がでた経緯については，『日本城郭体系 17 佐賀・長崎』の福江城（石田城）の項目によれば，「…わが国最西部の島嶼を基盤とする五島藩は，その近海に異国船の出没がきわめて頻繁であって，早くから海防の重要性を痛感していた。そのためすでに寛永18年（1641）に領内七箇所に遠見番所を設け，ついで正保４年には四箇所増設を行うなどの対策をとってきていた。こうした一連の動きの中で文化３年（1806）に藩主五島盛運は，異国船防御，つまり外圧への対処を理由として幕府に築城を願い出たが，許されなかった。しかしその二年後の同５年，長崎でフェートン号事件が起きて海防の必要性がいっそう痛感されるようになった。そこで時の藩主盛繁は，文政３年(1820)，再度幕府に築城許可を願い出たが依然として許可されなかった。しかしその後，嘉永２年(1849)，ついに幕府は築城を許可するにいたった（註２）。」と記している。

(2) 黒船長崎に来る

『日本城郭体系 17 佐賀・長崎』の福江城（石田城）の項目では，この文政３年（1820）から嘉永２年（1849）の29年の間は空白期間であるが，この間には何の事件もなかったのだろうか？　この問いには，竹野忠生氏の『黒船長崎に来る』に詳しい。

『黒船長崎に来る』によれば，天保15年（1844），黒船（軍艦）一隻が長崎港口の高鉾島沖に現れ，出島の沖合，水ノ浦の地先近くに投錨碇泊して号砲を放った。長崎来航の黒船は，オランダの軍艦で，同国使節コープスが，オランダ国王の書簡「我が国に開国の要を勧告」を携えてきた，最初の黒船であった。

オランダは，その後，弘化４年（1847）に，オランダ東印度会社長崎和蘭商館長（出島）を通し，その西洋の『風説書』をもって，長崎奉行所を経由して，幕府に「今，西洋諸国が結合して，日本に迫りつつある」との情報を呈上している。くこの弘化４年（1847）は，嘉永２年（1849）の幕府の築城

許可の2年前であるので，この一連の事件が許可を与えた直接のきっかけになった可能性がある（註3）。〉

その後もオランダは，嘉永3年（1850）には「アメリカが日本と貿易を開く意志がある」こと，嘉永5年には，和蘭長崎商館長クルチュウスが，長崎奉行所を通して幕府に「明年，アメリカ合衆国の使節が軍艦を率いて日本に来航し，強硬の態度をもって開国を迫る動きにある」ことを告げている。ペリー艦隊の浦賀来航は，この翌年の嘉永6年6月のことであった。これに一月遅れてロシア使節極東艦隊司令長官プチャーチンが，軍艦四隻編成で長崎に来航して，幕府に外交貿易の交渉を迫った。天保15年の〝黒船長崎来る〟は，ペリー艦隊浦賀来航の九年も前の出来事で，日本開国の端緒であったといわれている。

ちなみに，この天保15年（1844），黒船（軍艦）一隻が長崎港口の高鉾島沖に現れ，出島の沖合，水ノ浦の地先近くに投錨碇泊して号砲を放った時の長崎の街の様子は，同文献によれば，その日の港内の各船の水夫たちの動揺は隠しきれなかった。「筒音に肝魂を抜かし，顔色土の如くに変じ，祈りおるに」（『見聞略記』）と記されているとのことである。一方，長崎の町中では何の変化も生じなかった。往来は日常の活気にあふれ，主だったものには触頭のもとで，その詳細が知らされていた。市民は黒船による号砲が礼砲であることを知っていたから，なんらの動揺もなかった（註4）と記されている。

(3) 五島藩の海外情報収集伝達活動について

文化3年(1806)，藩主五島盛運は，異国船防御，つまり外圧への対処を理由として幕府に築城を願い出た訳であるが，その当時の海外情報をどの程度知っていたのであろうか？

この問いに対しては，沼倉延幸氏の『開国前後，長崎における海外情報の伝達活動について』に詳しい。それによれば，当時最重要機密情報であった海外からもたらされた世界情報　—阿蘭陀風説書・阿蘭陀別段風説書を始めとする情報—　等を，幕府がその利用について厳重な独占管理を企図していたにもかかわらず，情報発信地である長崎に在留した蘭学者・貿易商人・西国諸藩の家臣（長崎聞役＝長崎留守居）等の中には，阿蘭陀通詞を始め日蘭交渉に関与する町役人等を介してこれらを入手し，各々の国許や親しい関係者等に伝達し得たものがあり，その写本が全国に散在している（註5）と書き記している。

(4) 青方文書にみる五島藩の海外情報収集伝達活動

沼倉氏の上記文献によれば，五島藩の海外情報収集伝達活動をみるには，同藩の家老職を世襲した青方家に伝来した文書＝青方文書が最もまとまっているとのことである。五島藩は，対馬藩同様長崎近海の海上藩であり，異国船警備を重要な任務としたために，青方文書には番役軍備体制や築城計画に関するものが少なからず含まれているとのことである。これと相俟って，江戸後期以降異国船が頻繁に往来するにつれ，とくに藩主五島盛成の時代（文政12～安政5年）になると，海防及び対外関係情報に藩政上の関心が強まったとみられている（註6）。

青方文書の「風説袋」は，五島藩家老青方運善・晋賜父子のもとに届けられた書状や海外情報等を書き留めたもので，天保15年にオランダ国王の開国勧告書を携えて長崎に来航したパレンバン号の応接をめぐる情報を始めとして，安政年間に至るまでの内外の情報に関する風聞書等をほぼ年代順に綴じ合わせたもので，これに収められた多くの長崎発の情報は同藩の長崎聞役によって届けられたものとみられている。

長崎に駐在する聞役は，西国諸藩の聞役と情報を交換し，廻状の写しを作成するのが通例であったとみられている。こうした情報の蓄積により，長崎近海のみならず，薩摩藩経由の琉球近海の情報，対馬藩経由の朝鮮半島近海の情報をも入手することができ，加えて蝦夷地等北方海域や日本海沿岸の異国船情報を得ることもあった。五島藩においても，いわば九州沿岸を中心とする海域に渡来する異国船に関する主な情報を，日常的に把握する機会を有していたとみられている。

こうした廻状以外で，その入手ルートが記載されたものには，表１の天一冒頭のオランダの軍艦パレンバン号来航関係情報がある。それには「長崎奉行所江為御見舞御名代晋賜被差越，九月十三日着崎，十月廿二日崎港解纜」との記載があり，同艦の来航・応接に伴い，青方晋賜が長崎を訪れ滞在中に入手したものと察せられる。このとき自ら情報収集に何らかの形で関わった可能性もあろう(註７)と述べている。

第２表 「風説袋」(青方文書) 所収の主要海外情報一覧

巻	主　要　情　報
天一	オランダ本国船パレンバン号関係情報（天保十五年） 阿蘭陀風説書（弘化二年） 阿蘭陀通詞本木昌左衛門作成「極御内密奉申上候書面」（弘化三年、仏国船琉球渡来情報） 阿蘭陀風説書（同年） 阿蘭陀風説書（弘化四年） 択捉島漂着米国捕鯨船取調書（同年） 阿蘭陀別段風説書（同年） 阿蘭陀風説書（嘉永元年） 阿蘭陀別段風説書（同年） 松前漂着米国捕鯨船ヂャンブール以下申口（同年） 米国船プレブル号関係情報（嘉永二年）
天二	阿蘭陀別段風説書（嘉永二年） 老中阿部正弘御渡書付（同年） 江川太郎左衛門作成「存附之儀申上候書付」（同年） 南京条約写（天保十三年） 阿蘭陀別段風説書（嘉永三年） 蝦夷地マヒル漂着英国捕鯨船ローイット等申口（同年） 琉球へ万次郎渡航届書（嘉永四年）
人	万次郎以下漂流民申口（嘉永四年） オランダ船ヨアン号差出書類（同年） ペリー浦賀渡来情報（嘉永六年） 「七月二日御触写」（同年、米国大統領国書取計方） プチャーチン長崎渡来情報（同年） 三河国栄久丸船頭岩吉等尋問書（同年）
地一	五島藩領内碕山村沖異国船渡来情報（嘉永六年） 五島藩聞役紙上内蔵吉尋問覚（嘉永六年） 阿蘭陀風説書（安政元年） 唐国騒乱情報（同年） 英国船風説書（同年） ロシア使節渡来につき意見書（同年） 諸大名意見書及び落書等（嘉永六年） 阿蘭陀別段風説書（安政元年）
地二	英国船書翰和解（安政元年） 下田滞留ロシア人風聞（安政二年、熊本藩佐分利十右衛門等） 観光丸・海軍伝習関係情報（同年） 阿蘭陀別段風説書（安政三年） 英国評判記抜粋和解（同年） 米国使節着府・登城御目見次第（安政四年）

（凡例）「風説袋」（五冊、長崎県立長崎図書館青方文庫所蔵）に基づいて作成した。なお、同文書に収められた対外関係情報の一部も掲げたが、長崎聞役による廻状等の書状類については除外した。
（註５　文献より転載）

(5) 石田城築城許可の直接のきっかけはパレンバン号の来航か

沼倉氏は，五島藩の場合，海防政策に直接関わるオランダ本国船あるいは異国船の渡来情報に対する関心が，阿蘭陀別段風説書の内容理解や分析といった海外情報の政治的利用に通じる関心を数段上回っており，このことが青方文書に見えるこれらの情報の残存状況に反映しているもの（註８）と考えている。青方文書の「風説袋」の中で，天一冒頭にオランダの軍艦パレンバン号来航関係情報がくることは，この事項が最重要項目であったことが推察される。五島藩家老青方運善・晋賜父子にとっては，悲願の城の築城申請の理由付けの為には，この『パレンバン号の来航事件』は，まさに，〝渡りに船〟の心境ではなかったかと推考される。

天保15年（1844）の，『パレンバン号の来航事件』に始まり，弘化４年（1847）の，オランダ東印度会社長崎和蘭商館長（出島）を通し，長崎奉行所を経由して，幕府に「今，西洋諸国が結合して，日本に迫りつつある」との情報を呈上した事件が，築城許可の２年前であるので，年代的にみても，この一連の事件が，幕府が築城許可を与えた直接のきっかけになった可能性は，高いといえるのではないだろうか。

(6) 中世及びそれ以前の五島…〈国境をまたぐ地域〉の中で…（註９）

以上，五島藩家老青方運善・晋賜父子等の努力により石田城の築城が実現したのではないかと，みてきたわけであるが，この近世以前の中世ないしはそれ以前の五島の様子はどうだったのであろうか。

五島における中世の研究については，近年，文献及び石塔等の石像美術品の研究により，その輪郭がみえてきつつある。即ち，文献では『朝鮮王朝実録』を扱った村井章介氏の『中世倭人伝』（註10）であるし，石塔等の石像美術品では，五島列島若松町日島所在の中世墓群の調査・研究をおこなった『曲古墓群』の調査報告書である。

『曲古墓群』の石塔の調査を行った大石一久氏は，その結語にかえての中で以下のように述べている。以下長くなるがそのまま引用させていただきたい。

最近，五島・対馬・平戸・壱岐などの島々が，あらたに注目を浴びている。それは単なる地方史的な意味ではなく，アジア史的な広い意味での注目である。

五島・対馬などは，いうまでもなく中国・朝鮮半島と日本列島とのはざまに浮かぶ島々であり，有史以前より交流の舞台をなす飛び石の地として重要な役割を果たしてきた。

しかし，最近注目されてきた点は，これまでのような単なる文物の行き交う通路としての役割ではなく，対馬・五島などの〈国境をまたぐ島々〉を一つの世界ととらえ，その社会がもつ特異なあり方にあらたな世界観を見いだそうとする考え方である。

昨年刊行された村井章介氏の「中世倭人伝」（岩波新書）は，そのような日本・朝鮮・中国のはざまに生きる人々を〈マージナルマン〉と呼び，「かれらが身におびる特徴は，なかば日本，なかば朝鮮，なかば中国といったあいまいな（マージナルな）もの」という。

村井氏は，このような考えを，主に「朝鮮王朝実録」を史料としてひきだしているが，〈国境をまた

ぐ島々〉のもつ特異性は，渡来仏をはじめとするいろいろな搬入物からも読みとることができる（註10）と述べている。

しかし，五島と対馬は，地理的位置が違うことから，担った役割も違うし，その活躍の時期もずれている。対馬が，朝鮮半島に近いという地理的条件から，国家間の正式の関係に裏打ちされた日朝間の交流を行ない，その活躍の時期が15世紀であったのに対し，五島は，16世紀に台頭してくる〈環シナ海地域〉の大きな交流の中で登場してくる。

村井氏はこのことを，国家間関係を軸とする交流に変わって，非合法的で，多民族的で，しばしば暴力をともない，そしておそらくはより大規模の，交流が登場してくる。「後期倭寇」ということばで一括されている多様な海上勢力こそ，その交流のにない手にほかならない。たとえば五島や平戸や博多の倭人海商，たとえば王直を代表する江南沿海地方の大海商，たとえばシナ海交易ルートに乗って，マラッカからマルク（モルッカ）諸島，広東，舟山諸島，琉球，そして九州へと進出してきたポルトガル勢力。かれらはみな，密貿易によって明の海禁体制を空洞化させ〈環シナ海地域〉の一体性を成熟させていった人々である。密貿易こそ，この時期の交流のメインなかたちだった。(註11)と述べている。

同じく村井氏は，1540年に済州島に，一隻の「荒唐船」があらわれた。「荒唐船」とは，倭船か唐船か不分明な海賊船をよんだ朝鮮側の名称で，このころから『実録』に頻出する（註12)。この「荒唐船」の乗組員は五島の倭人だった。同じく村井氏は，この後まもなく王直が五島に現れることや，この船に中国人が関係していた形跡がないのに朝鮮がこれを「荒唐船」と記録したことからみて，五島倭人の動きは，16世紀の東シナ海域で活動した倭寇（いわゆる後期倭寇）の一翼をになうものといえる（註13）と述べている。

(7) 前，後期倭寇の活動と『曲古墓群』

ここで，『曲古墓群』の調査報告書の中の大石氏が作成した（紀年名・形態による製作年代分類表）をみると（註14)，1370年代に活動がピークを迎える前期倭寇の活動の時期と「荒唐船」とよばれた後期倭寇の時期に石塔建立のピークが認められる。また，〝曲崎〟と呼ばれる海につきだした岬上に墓地が営まれている点や，北方の海域を向いた石塔の立地等から考えてもまさに前期及び後期倭寇として活動した人々の墓地が『曲古墓群』である可能性は高い。

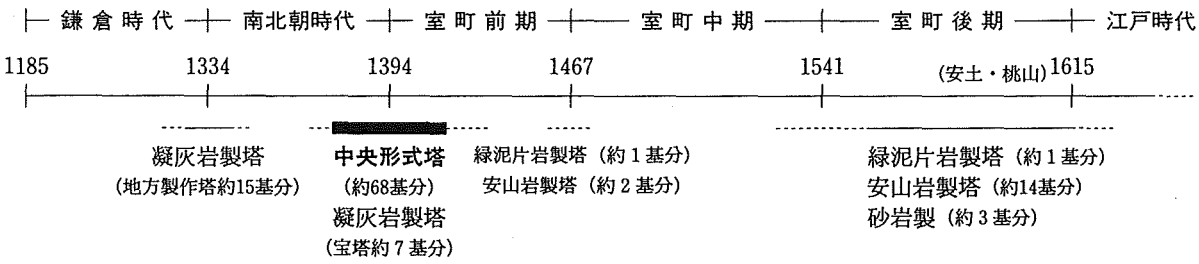
(8) 五島藩主17代盛定と「王直」(註15)

天文９年（1540）五島家当主17代盛定は，交易を求めて来航した王直に対し，居城（江川城）の対岸に土地を与え，唐人町を開かせた。その際，来航してきた唐人たちが江川城本丸下につくったのが，現在，県指定史跡になっている「六角井」である。また，その当時祀られた堂宇の跡が現在，明人堂跡として残っている。

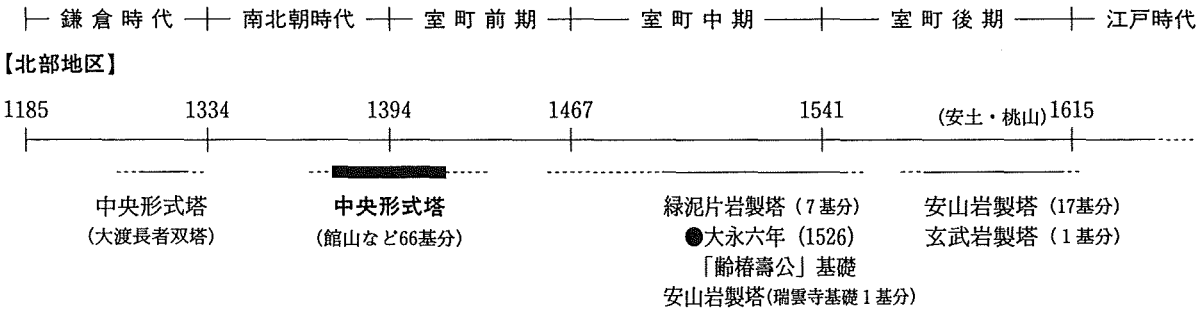
第3表　紀年銘・形態による製作年代分類表

〔時代区分は，田岡香逸著「仏教考古学講座」（第3巻，雄山閣）などによる〕

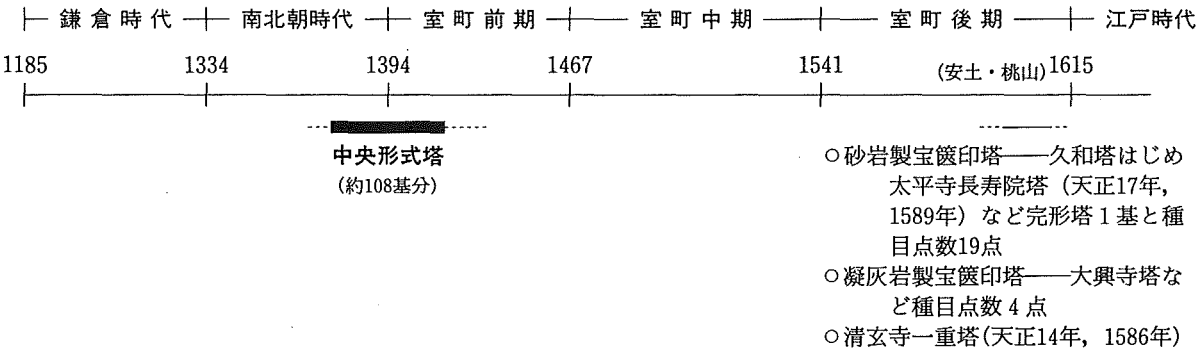
〔日島とその周辺〕



〔平　戸　島〕



〔対　　馬〕



大石一久「日島の中世・石造美術」『曲古墓群』若松町教育委員会より転載

(9) まとめにかえて

村井氏によれば，王直が居宅をかまえた五島や平戸という場所は，アジール（その中に逃げ込めば罪を問われない平和領域）の性格をおびた倭寇活動の策源地となっていた。おなじことは，双嶼や瀝港といった江南の多島海域の港市についてもいえるし，朝鮮半島南辺の多島海や済州島にも同様の場所があった。〈環シナ海地域〉とは，こうしたいくつかの拠点を結びつける人間活動のネットワークにあたえられた名前である（註16)。と述べている。

こうした中世の〈環シナ海地域〉の歴史的状況をみると，異国船防御，つまり外圧への対処を理由として石田城の築城許可がおりたことは，さしたる不自然さは感じられないのは，私だけの感覚であろうか。また，長崎に，出島や唐人屋敷ができるのも，この中世の〈環シナ海地域〉の歴史的状況と無関係とは考えられない。石田城二の丸の，西南隅に造られている国指定の五島氏庭園は，「心字ケ池」を中心に造られている。周囲の庭石と築山は，すべて「鬼岳」の溶岩を用いており，植栽はビロージュや，オオタニワタリ等の南海産の亜熱帯植物を配置している点に特徴がある。庭の特徴も，南海産の異国情緒豊かなものになっている（註17)。

この朝鮮半島南辺の多島海や済州島，対馬，壱岐，平戸，五島，西北九州といった地域は，弥生時代の昔から「魏志倭人伝」にでてくる「倭人」の活動領域であった。このことは，縄文時代まで遡ることができるし（註18)，弥生時代以降の古墳時代にもいえる（註19)。古代の状況は今後の研究にまつしかないのかもしれないが，とにかく，この地が，縄文時代の昔から根強く「海人」としての伝統をもっていたことだけは間違いなさそうである。

東シナ海の自由な大海原を活動領域とする「倭人」が，国家からの統制（海禁）をうけたとき，この海域の人々は，「倭寇」と変身するのであろうか。

藤田明良氏は，従来，「海禁」の強化は「倭寇」の跳梁の結果としてとらえられてきた。しかし，中国でも貿易統制や沿岸統制が強化されるのは，「大規模倭寇」に先行する13世紀末からである。「海禁」による国家の側の介入強化とそれに対する海域世界の抵抗が，「倭寇」を顕在化させたという見方も，可能であろう（註20)。と述べている。

『曲古墓群』の物言わぬ石塔群をみるとき，一抹の感慨にひきこまれる。それは，東シナ海の大海原を跳梁する人々が，最後は，信仰の証としての石塔の下に安住の地を求めた訳で，彼らが，依るべき国家の代わりに求めた信仰の形態はどのようなものだったのだろうか。興味が引かれる。

《註》

註1　〈環シナ海地域〉の設定は，村井章介氏による

註2　1980『日本城郭体系17 長崎・佐賀』194頁

註3　〈 〉内は筆者註

註4　1995竹野忠生 歴史探訪『黒船長崎に来る』そよかぜ第24号　㈶長崎県すこやか長寿財団

註5　1995沼倉延幸『開国前後，長崎における海外情報の収集伝達活動について』書陵部紀要　第47号　宮内庁書陵部

註6　「華蛮要言」（青方13―16，同17―38～40）等により，五島藩の異国船取り扱いの具体的事実等を知ることができるとされる。

註7　註4文献　43，44頁

註8　註4文献　45頁

註9　藤田明良氏の『日本中世史研究辞典』の中の【国境を越える交流の発見】によれば，80年代，中世対外関係の分野では，従来の外交・貿易史に対し，国境を越える交流に注目する研究が登場した。その中で交流の担い手が国家から相対的に自由な立場を持ち，独自の世界を形成しているということが判ってきた。村井氏は，彼らの活動の場・帰属意識の拠り所として，国境をまたぐ「環シナ海地域・環日本海地域」の設定を試みた。

註10　1994村井章介『中世倭人伝』岩波書店

註11　1996大石一久「日島の中世･石造美術」『曲古墓群』―五島列島若松町日島所在の中世墳墓群―　若松町文化財調査法告書第1集　長崎県若松町教育委員会　125頁

註12　1989高橋公明「16世紀の朝鮮・対馬・東アジア海域」加藤栄一他編『幕藩制国家と異域・異国』校倉書房

註13　註10文献192頁

註14　註11文献86頁

註15　『長崎県の文化財』1991長崎県教育委員会294頁

註16　註10文献210～211頁

註17　この庭園を国指定するにあたって，尽力された安原啓示文化庁調査官は，石田城も，それに足るだけの価値を有すること，他の県内の海城についても，同様の価値を有することを述べられたことがある。

註18　対馬，峰町の縄文時代後期の貝塚である佐賀貝塚では，朝鮮半島からの搬入品であるキバノロ上顎犬歯製垂飾や，南海産の巨大なホシキヌタ製装身具等が出土しており，縄文時代から南北市羅していたことが知られる。正林護1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第9集　長崎県峰町教育委員会

註19　石野博信氏は，『海洋航海民の古墳』の講演の中で，その当時（古墳時代）には，朝鮮半島からの舶来品である鍛造の鉄は，非常な貴重品で，当時の畿内の豪族は，これを欲しがった。この鍛造の鉄（鉄挺）を，朝鮮半島から運んだのは西北九州沿岸の人々であった旨を指摘された。

註20　藤田明良1995【「海禁」と抵抗】「日本中世史研究辞典」東京堂出版

III 調　　査

1．範囲確認調査

(1) 調査概要

調査期間は，平成7年5月15日～6月7日で，調査面墳は，251㎡である。まず，調査は，工事進入道路の予定部分にあたる二の丸東側石垣内からはじめ，2m×10m，2m×5m等の試掘坑を計17箇所設定し，着手順にTP番号を付して行った。本丸にも1箇所，TP14を設定した。

その結果『旧五嶋領ノ図』の絵図面に記載された二の丸部分における「〆切門跡」,「荷上門跡」やそれに付随する石垣の基礎部分を確認した（TP4，5，8，9，15，第5図参照)。

また,『旧五嶋領ノ図』の絵図面には，石倉等の建物跡なども記載されているが，それに該当する場所に設定したTP5，6では，いずれも建物跡の礎石等を確認できなかった。本丸に設定したTP14では溝跡を確認した。

(2) 土　　層

土層は基本的には，ごく新しい地質時代の玄武岩質火山活動によって形成された玄武岩の基盤の上に客土及び表土をなしている。TP2，5～7等ではグラウンドの整地面下10cm内外で玄武岩の基盤層にあたる。場所によっては1m程掘り下げても基盤層にあたらないところから，元々の地形はある程度起伏があったものであろう。

TP1南壁土層図を以下に示す。

第1層　表土層

第2層　茶褐色粘質土層（石垣の土台部分にあたり，粘質土を使用したものか）

第3層　黒色土層（炭化物混じり，近世陶磁器・すり鉢等がこの層より出土）

第4層　灰色土層

第5層　赤褐色土層

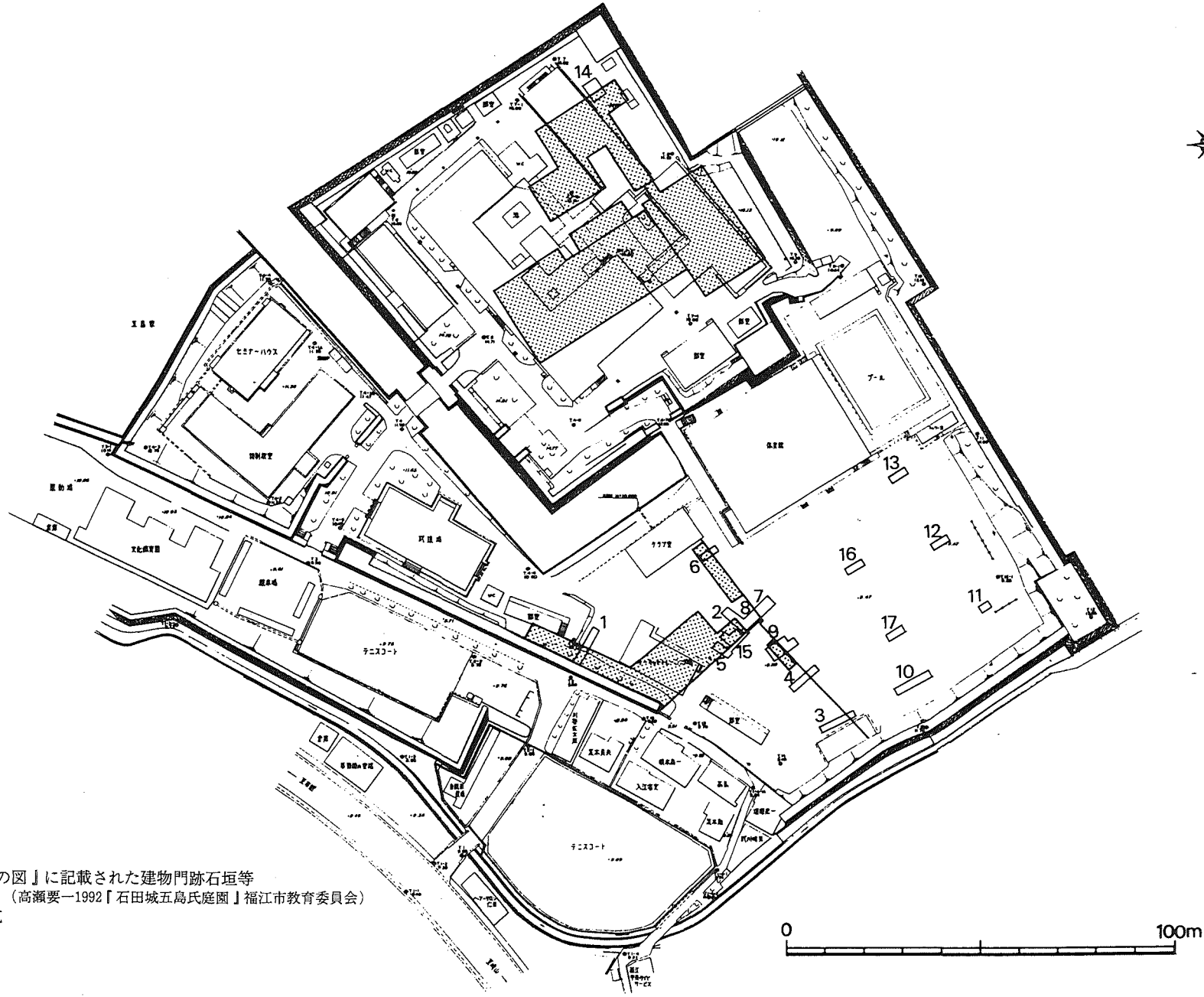
第6層　灰褐色混礫土層（親指大の礫混じり）となり，二の丸東側石垣基礎の版築状況が判明

(3) 遺　　構

『旧五嶋領ノ図』の絵図面では，二の丸東側石垣から東にのびる石倉と石垣荷上門が記載されており，この石垣は直角に折れ大手門につづくこの荷上門の東側には，南側石垣からのびてきた石垣及び〆切門が接続している。これらの場所に設定した試掘坑から，それぞれ該当する遺構を検出している。

TP5……現存する二の丸東側石垣から,『旧五嶋領ノ図』の絵図面で，東側にのびる石垣の基礎（現存する石垣の角には，接続部の跡が残っている）

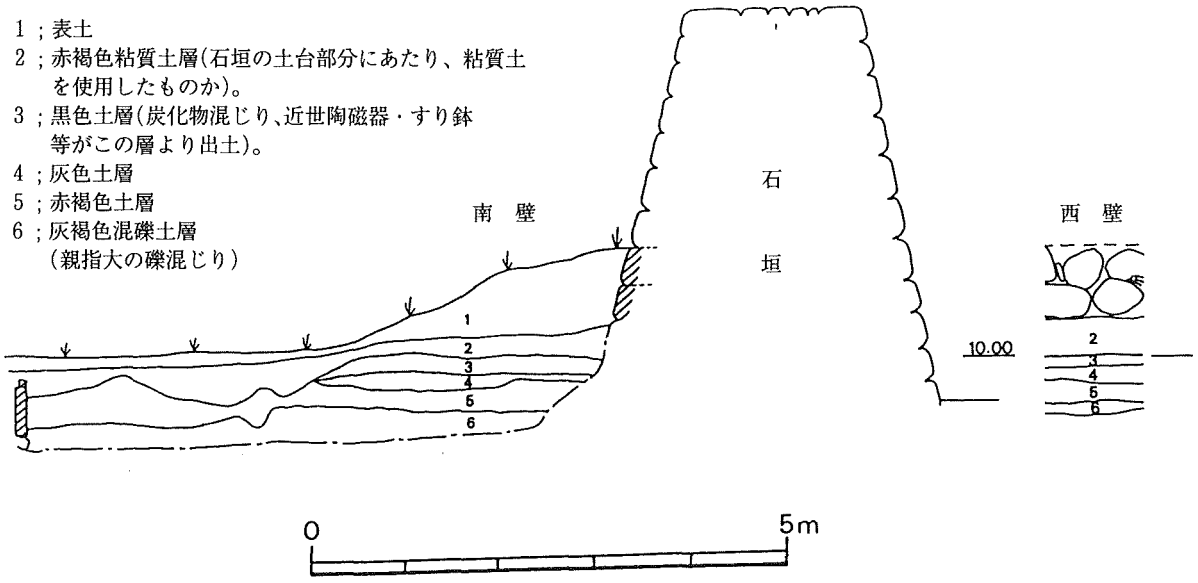
TP15……荷上門跡



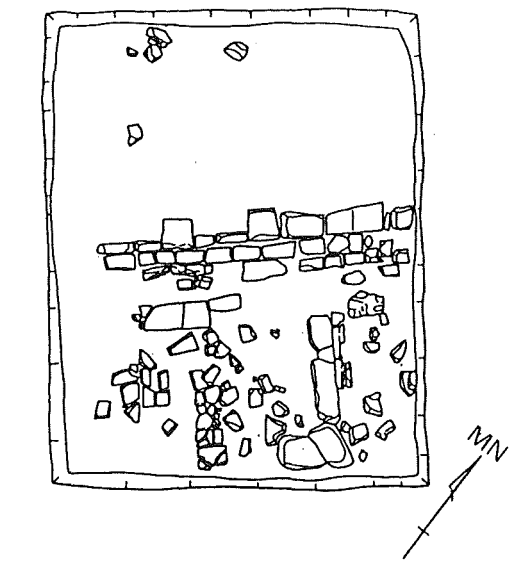
第3図　試掘坑配置図及び新旧建物配置図（『旧五嶋領ノ図』を現況図に重ねたもの）〔S＝1/1,500〕

ＴＰ１土層図

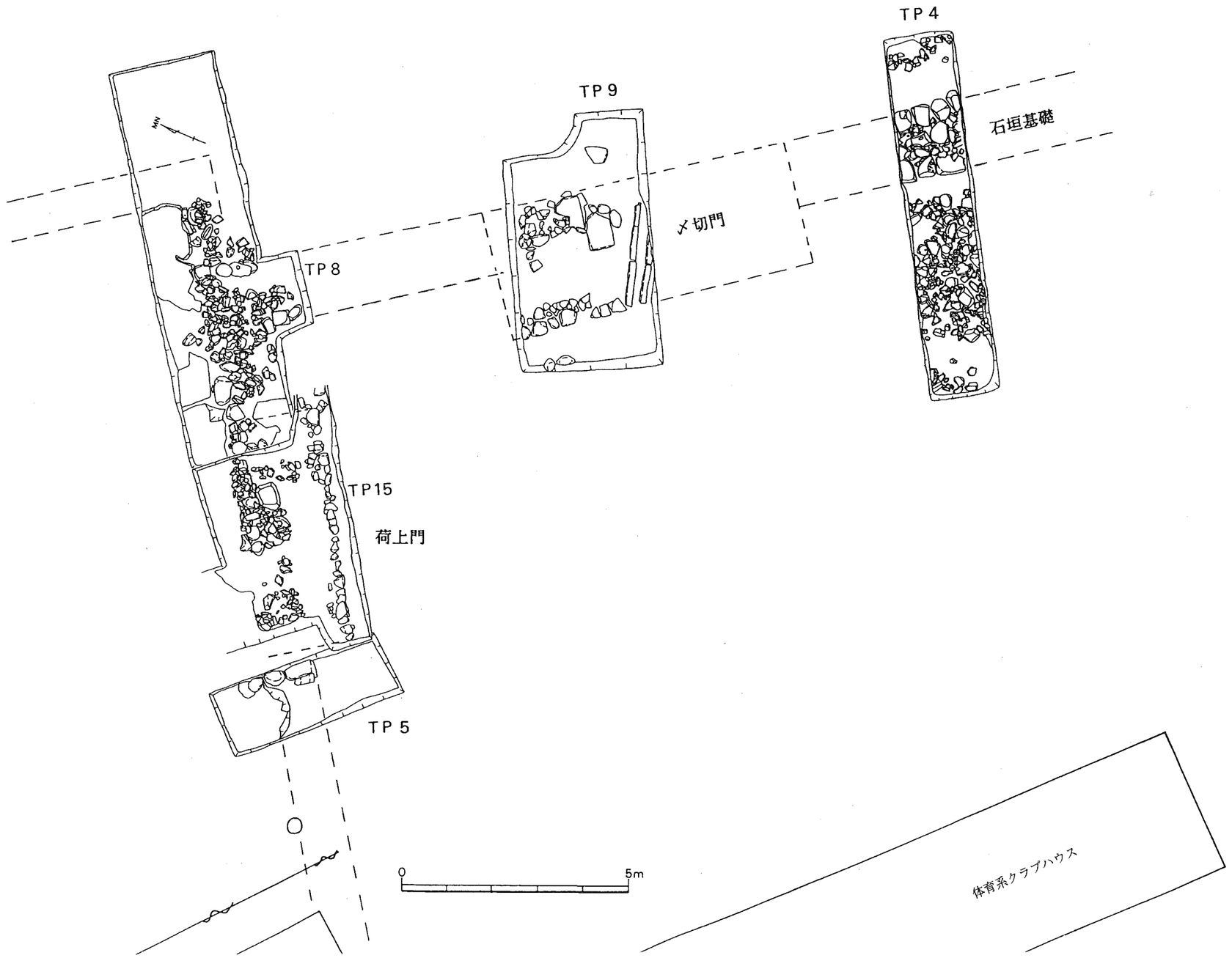
1；表土
2；赤褐色粘質土層(石垣の土台部分にあたり、粘質土を使用したものか)。
3；黒色土層(炭化物混じり、近世陶磁器・すり鉢等がこの層より出土)。
4；灰色土層
5；赤褐色土層
6；灰褐色混礫土層
（親指大の礫混じり）



ＴＰ14



第４図　範囲確認調査土層及び遺構図（ＴＰ１・14）〔Ｓ＝１/80〕



第5図　範囲確認調査遺構図（ＴＰ4・5・8・9・15）〔Ｓ＝1/100〕

ＴＰ８……南側石垣からのびてきた石垣及び〆切門の接続部と直角に曲がって大手門に接続する石垣の抜き取り跡

ＴＰ４……南側石垣からのびてきた石垣の基礎

ＴＰ９……〆切門跡

(4) 出土遺物

遺物はＴＰ６以外の各試掘坑から近世陶磁器，瓦片，すり鉢他が出土している。ＴＰ１では３層の黒土層から，それ以外では玄武岩の基盤層の上の客土層から出土している。第７～９図には，主なものを図示している。（ ）内は，遺物番号。

ＴＰ１……近世陶磁器（1，10，12），瓦片，すり鉢等（19，20），不明銅製品（33，34）。

ＴＰ２～５……近世陶磁器，瓦片等。

ＴＰ７……近世陶磁器，瓦片等（23），鉄釘（25）。

ＴＰ８……近世陶磁器（18），瓦片，鉄釘（26），ガラス瓶（30）。

ＴＰ９……近世陶磁器，瓦片，すり鉢，鉄釘等。

ＴＰ10……近世陶磁器（9，14，17），瓦片等。

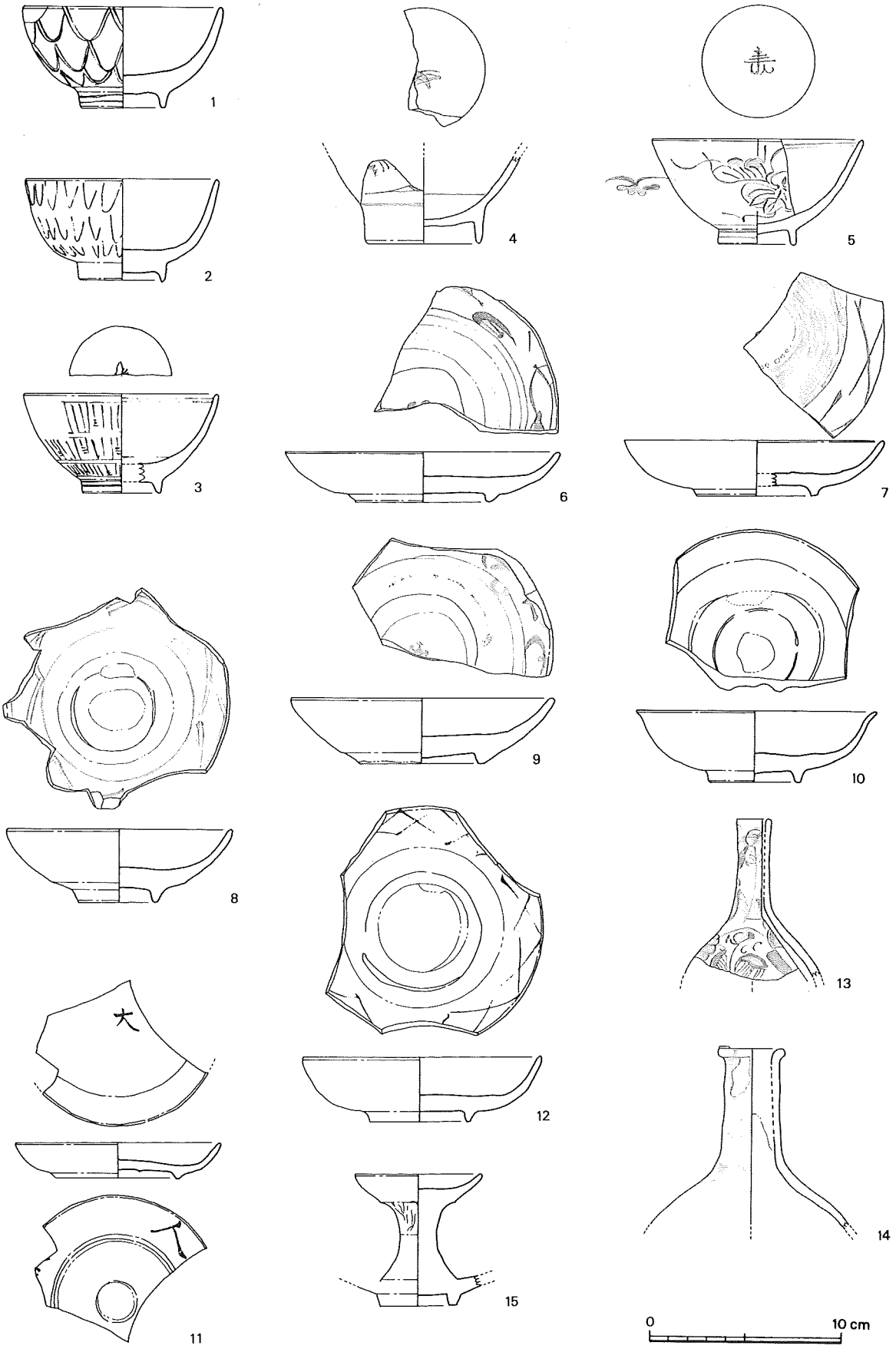
ＴＰ11～13……近世陶磁器，瓦片等。

ＴＰ15……近世・近代陶磁器（13，16），瓦片（24），すり鉢（21）。

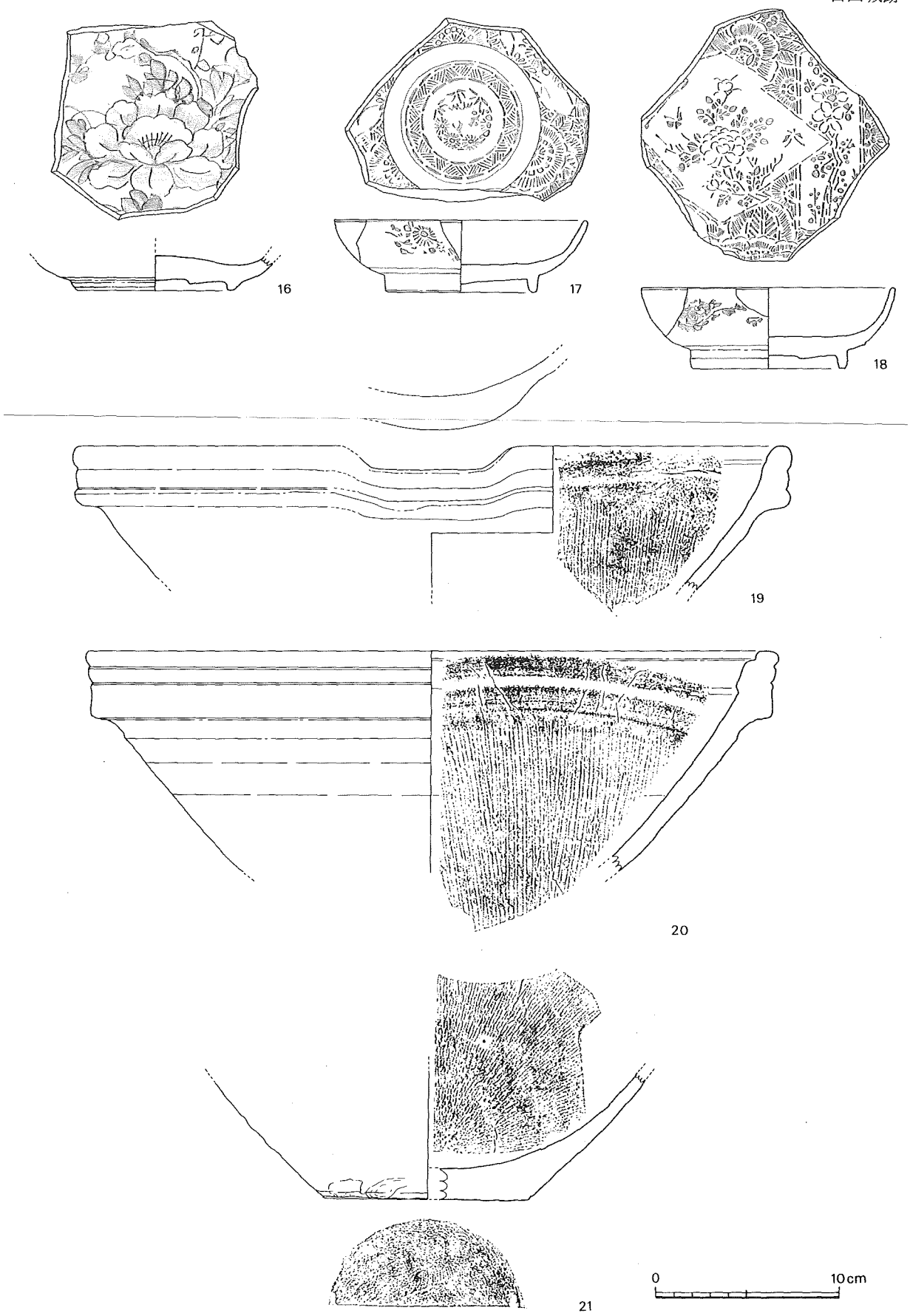
ＴＰ16……近世陶磁器（1，6，8，15），瓦片等。

ＴＰ17……近世陶磁器（3，4，7，11），瓦片等。

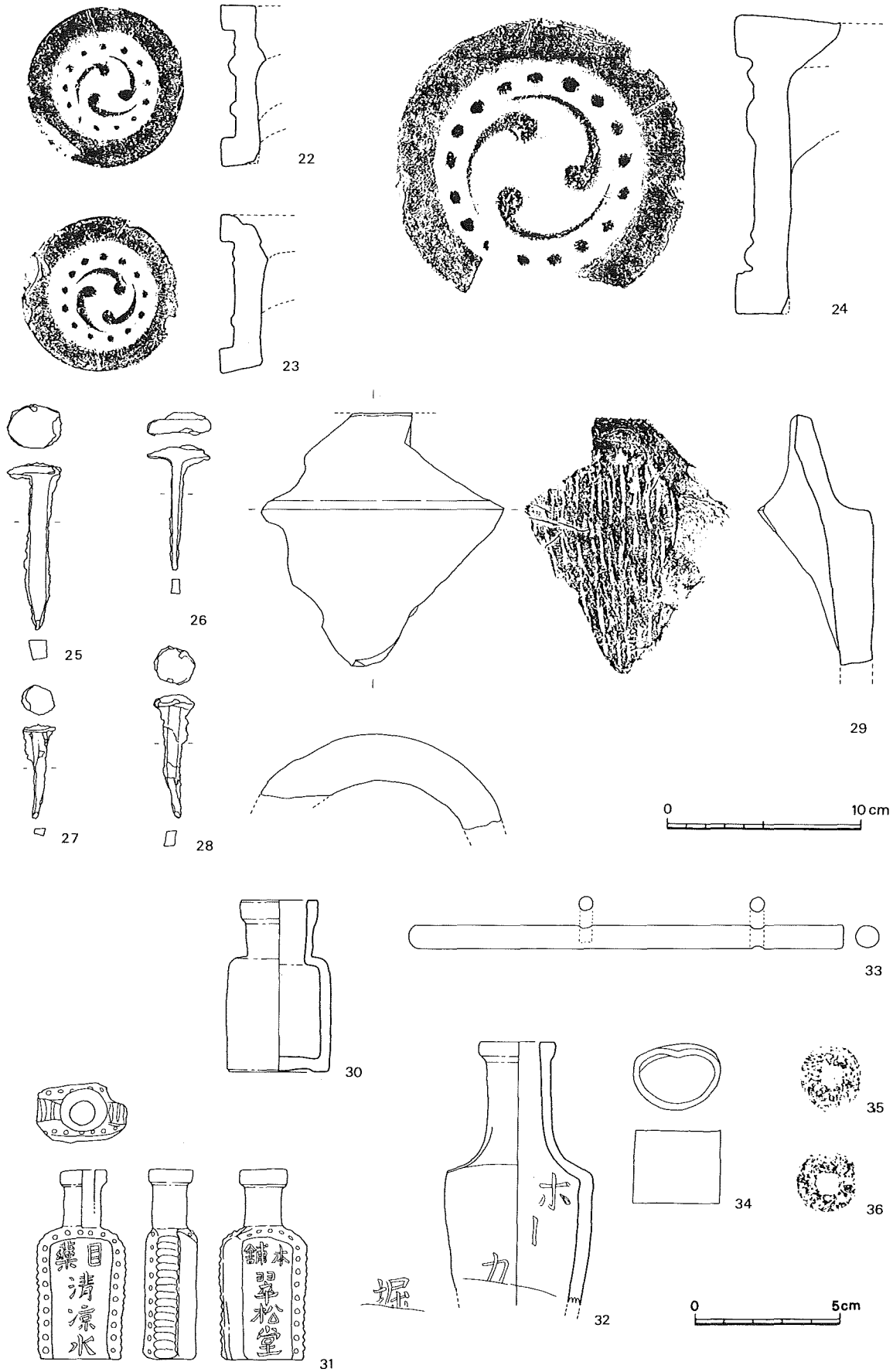
1～15は，近世陶磁器である。碗（1～5）・皿（9～12）・花差し（13）・徳利（14）・仏飯碗（15）等がある。いずれも肥前系の近世陶磁器である。1は，二重網手文，4は，高高台碗である。16～18は，コバルト顔料を使用した皿で明治期のものであろう。19，20は，備前のすり鉢である。復原口径は，それぞれ38.6cmと38.2cmである。21は，すり鉢の底部である。底部径11.0cm，糸切り底である。22～24は，軒丸瓦で，大小二種類を示した。外径・内径・文様面の深さは，22が，8.3cm・5.1cm・0.8cm，23が，8.0cm・5.4cm・0.7cm，24が，15.0cm・10.7cm・1.0cmである。25も，瓦片であるが，裏面に布痕と叩き痕がついている。色調は黄褐色である。26～29は，鉄釘である。長さは，26が，6.1cm，28が，6.1cmである。30～32は，ガラス瓶である。30は，円筒形の透明なガラス瓶で，高さ・最大径・口径は，それぞれ5.9cm・3.6cm・2.7cmである。口縁一部欠。31は，完形の目薬瓶である。色調はコバルトブルーで，高さ・最大幅・奥行は，それぞれ7.0cm・3.0cm・1.9cmで，重さは19.91ｇである。表に「目薬　清涼水」，裏に「本舗　翠松堂」の銘がある。32は，四角柱形の透明なガラス瓶である。底部欠。胴部に「ホーカ？」の銘がある。33は，不明銅製品で，一方の穿孔は貫通していて，もう一方は途中で止まっている。長さは，14.9cm，重さは52.75ｇである。34も不明銅製品である。もともと円筒形だったものが，少しひしゃげたものであろう。幅2.5cm，厚みは，0.2cmである。35，36は，銅銭の拓影であるが，腐食していて銘が判らない。



第 6 図　範囲確認調査出土遺物①〔S＝1／3〕



第７図　範囲確認調査出土遺物②〔Ｓ＝１／３〕



第8図　範囲確認調査出土遺物③〔22～29 S＝1/3，30～36 S＝1/2〕

(5) ま と め

調査に入る前は，『旧五嶋領ノ図』の絵図面に記載されている遺構が，どの程度残っているのかが一番の関心事だった。結果的には，損壊が激しいものの絵図面通りの遺構を確認できた。瓦や鉄釘，漆喰塊等の出土遺物も，門や，門につながる土壁の上に載せてある瓦等の遺物であろう。

本丸部分については，ＴＰ14において排水路跡を確認したので，本丸部分の建物跡の遺構の一部分を確認することができた。おそらく，建物跡に付随する排水路であろうと判断された。

以上のように，『旧五嶋領ノ図』の絵図面に記載されている遺構を，発掘調査によって確認できたことが今回の成果であろう。

2．緊急発掘調査

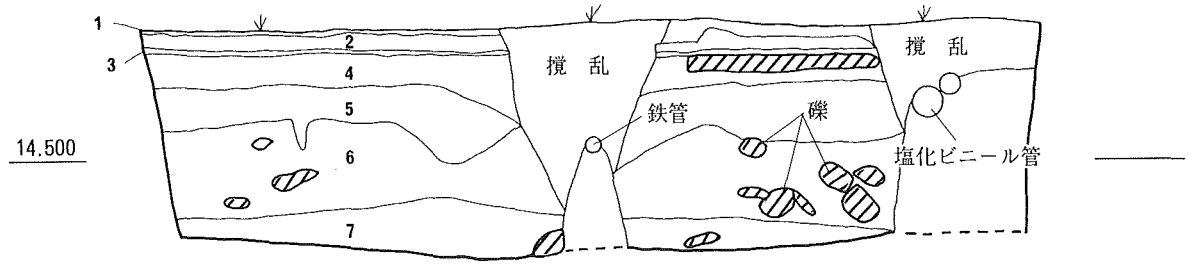
(1) 調査概要

調査は，平成８年７月22日～８月９日及び８月26日～８月30日の期間で行われた。調査区は新校舎が建設予定の本丸跡部分を対象とし，校舎・部室・道路等がない場所にトレンチを設定し，着手順にトレンチ番号をつけた。トレンチは校舎中庭部分に９箇所，新館・衛看棟裏側部分に７箇所，合計16箇所設定した。

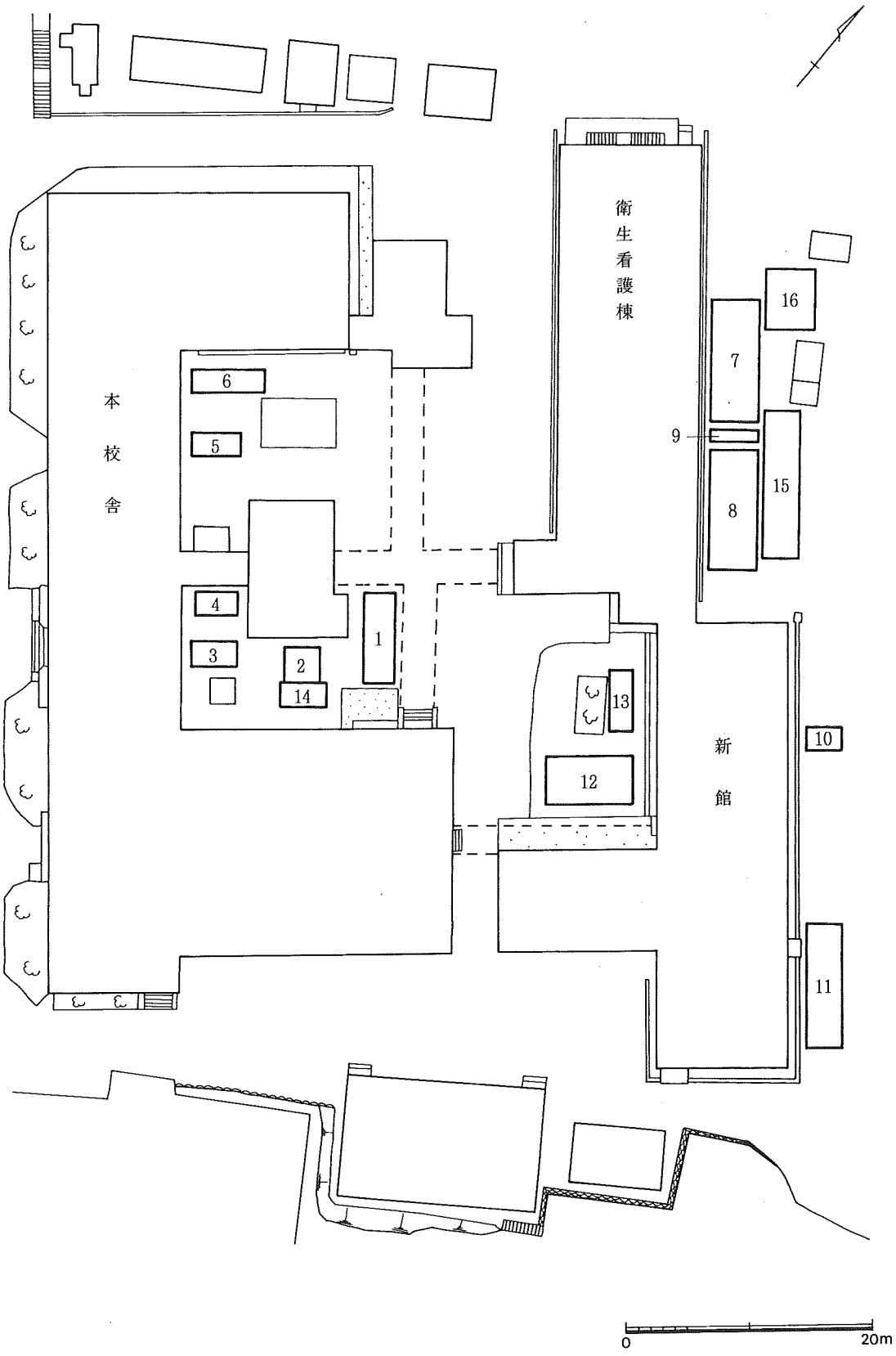
(2) 土　　層

土層は基本的に第四紀更新世の鬼岳火山群の溶岩による玄武岩が基盤となり，その上に表土及び客土がのっている。表土及び客土の厚さは約70cmである。撹乱が多く層序がとらえにくいが，第２トレンチ東壁で以下の通りである。

第１層　表土層
第２層　橙色土層（非常に乾燥しており，石化して堅い）
第３層　暗茶色土層（やや乾燥している）
第４層　茶色土層（やや粘質がある）
第５層　茶色土層（第４層と似ているが，炭化物を多く含む）
第６層　茶褐色土層（やや粘質があり，礫を含む）
第７層　赤褐色粘質土層（粘質が強い，玄武岩の風化土層）



第９図　緊急発掘調査土層図（第２トレンチ東北壁）〔Ｓ＝１/25〕



第10図　緊急発掘調査区位置図〔S＝1/500〕

(3) トレンチごとの遺構残存状況

① 第1～4及び14トレンチ

校舎中庭の本館側南東部分である。『旧五島領ノ図』の絵図面によると本丸の建物部分にあたる。

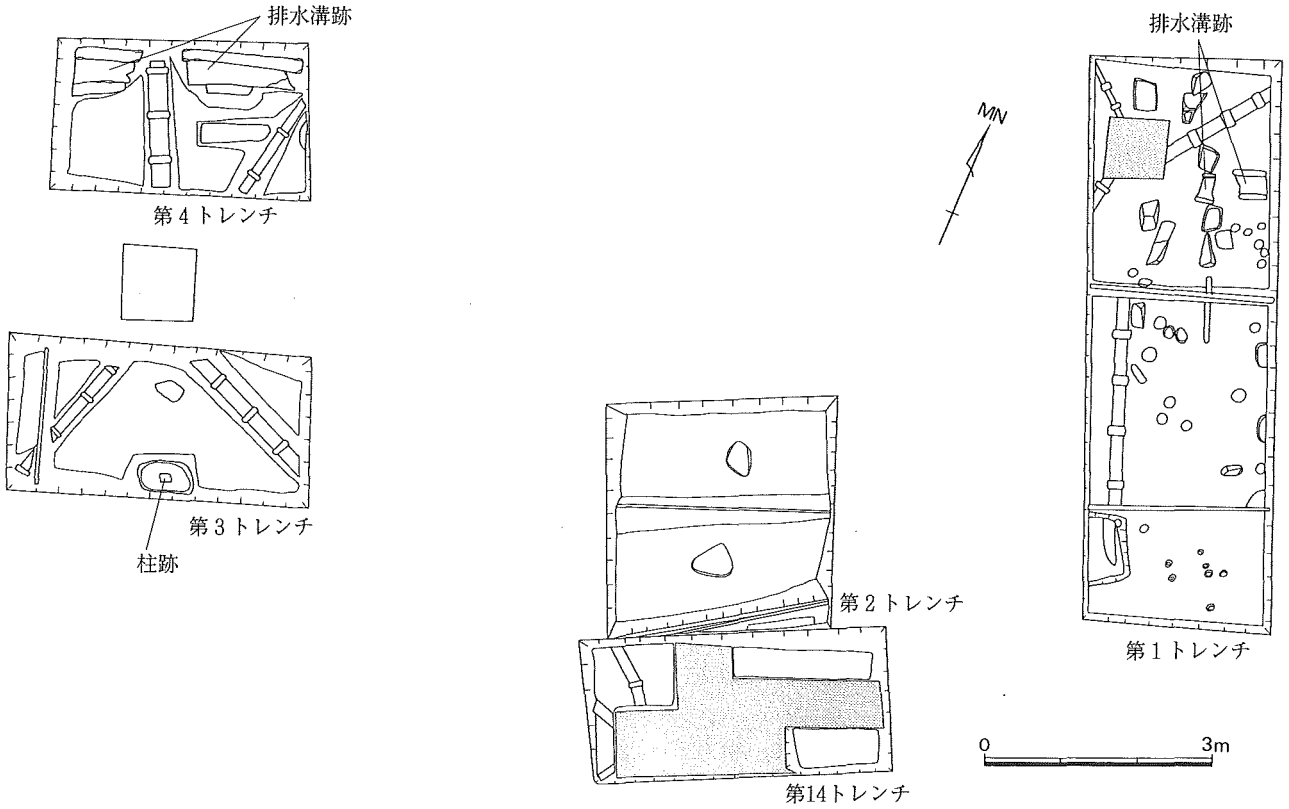
第1トレンチでは幅約40cmの石造りの排水溝跡が検出された。しかし，土管と集水施設により破壊されており，残存している長さは50cmそこそこである。また，一辺が30～40cmの方形の礫がみられるが，土管や鉄管が錯綜しており，それに伴いかなり撹乱されている。

第2トレンチでは直径約40cmの円形の礫と，一辺約50cmの三角形の礫が150cmの間隔で，ほぼ同レベルで検出された。礎石として利用されたと思われる。

第3トレンチでは長辺約70cm，短辺約40cmの長方形の礎石と思われる礫が検出された。この礫には一辺10cmの正方形の柱痕が残っている。レベルは第2トレンチの礫より約10cm高い。

第4トレンチでは幅約50cmの石造りの排水溝跡が検出された。トレンチの北西側を南西～北東に横切っているが，真ん中と北東端は土管埋設の際破壊されている。第1トレンチの排水溝跡と比べると幅も広くしっかりとした造りであるが，方向からみてつながるものと思われる。

第14トレンチは10cmほど下は，大部分がコンクリートに覆われ，そうでない部分も土管が集中していることから遺構の検出はできなかった。



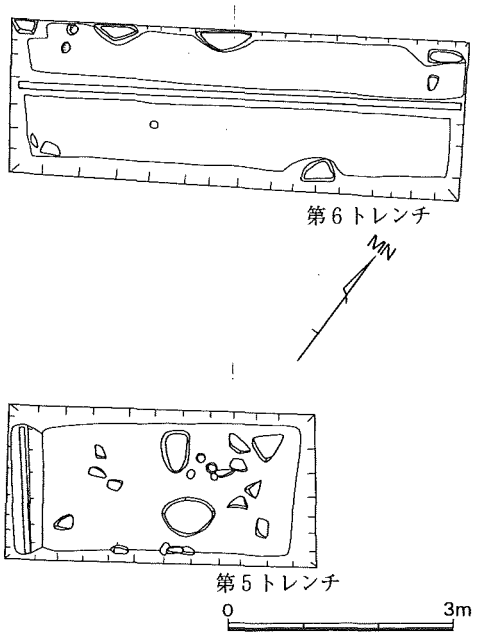
第11図　緊急発掘調査遺構図①〔S＝1/100〕

② 第5・6トレンチ

校舎中庭の本館側北西部分である。『旧五島領ノ図』の絵図面では，建物等に記載はない。

第5トレンチでは，長径70cm，短径50cmの楕円形の礫と，長径60cm，短径40cmの楕円形の礫が，90cmの間隔で検出された。二つの礫はほぼ同レベルである。

第6トレンチでは長径60cm，短径20cmの楕円形の礫と，長径70cm，短径25cmの楕円形の礫が150cmの間隔で検出された。二つの礫はほぼ同レベルである。さらにその延長300cmの位置に長辺50cm，短辺20cmの長方形の礫がみられたが，レベルは約17cm低いため一連のものとは思われない。



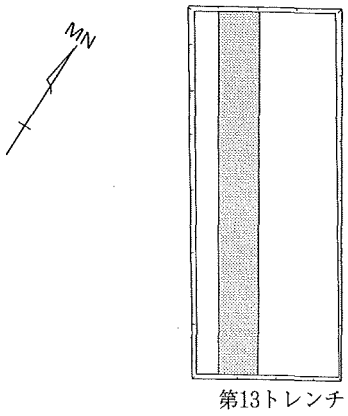
第12図　緊急発掘調査遺構図②〔S＝1/100〕

③ 第12・13トレンチ

校舎中庭の新館棟側部分である。『旧五島領ノ図』の絵図面では，建物部分にあたる。

第12トレンチは，東側部分は10cmほど下が鉄筋コンクリートの建築物の基礎であり，中央部分から西側部分にかけては，コンクリートブロックで作られた3箇所の集水施設があった。そのため撹乱が激しく遺構の検出はできなかった。

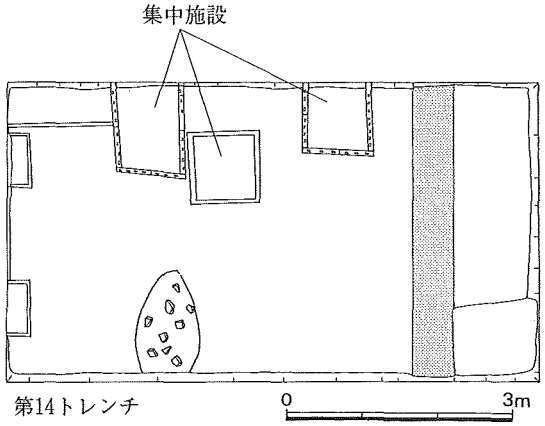
第13トレンチは，鉄筋コンクリートの建築物の基礎部分が大半を占め，遺構の検出はできなかった。



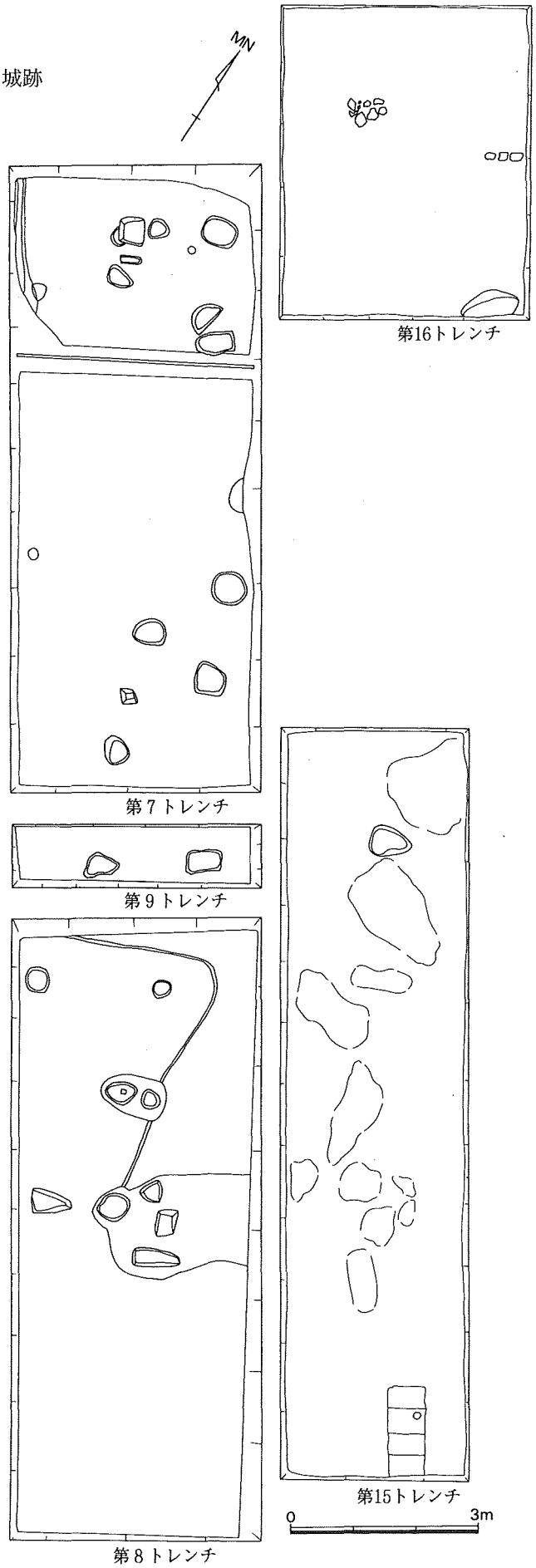
④ 第7～9及び15・16トレンチ

衛看棟の裏側部分である。『旧五島領ノ図』の絵図面によると，建物部分及びその周辺にあたる。

第7～9トレンチにかけて，直径40～50cmの円形の礫の並びが10m以上にわたり2列検出された。柱痕のあるものもあり，礎石であったと思われるが，一直線の線とは若干ずれが



第13図　緊急発掘調査遺構図③〔S＝1/100〕



第14図　緊急発掘調査遺構図④〔S＝1/100〕

あるため，原位置からは少し移動している可能性もある。また，第8トレンチの北側部分からは，多量の瓦が集中して出土した。

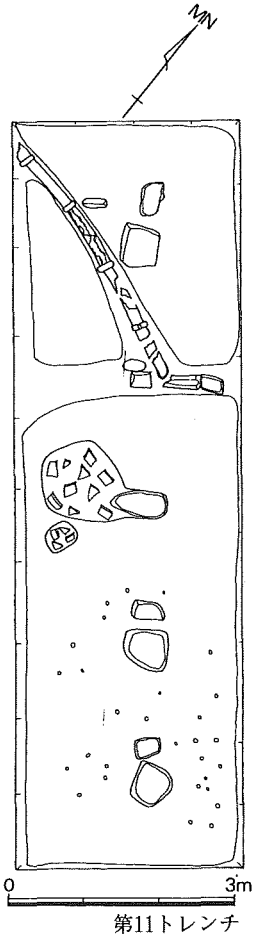
第15・16トレンチには，破棄された鉄筋コンクリートが埋められており，遺構は検出されなかった。

⑤　第10・11トレンチ

新館棟の裏側部分である。『旧五島領ノ図』の絵図面によると，建物部分及びその周辺にあたる。

第10トレンチは，約40cm掘り下げたが遺構も遺物も発見できなかった。

第11トレンチでは，約8mにわたって礫の列がみられた。礫は直径50～60cmの円形で，約180cmの間隔で並んでおり，レベルは数cmの差があるが，礎石だと思われる。また，中央部分からは瓦が集中して出土し，南部分では直径5～10cmの玉砂利が多数みられた。



第15図　緊急発掘調査遺構図⑤〔S＝1/100〕

(4) 出土遺物

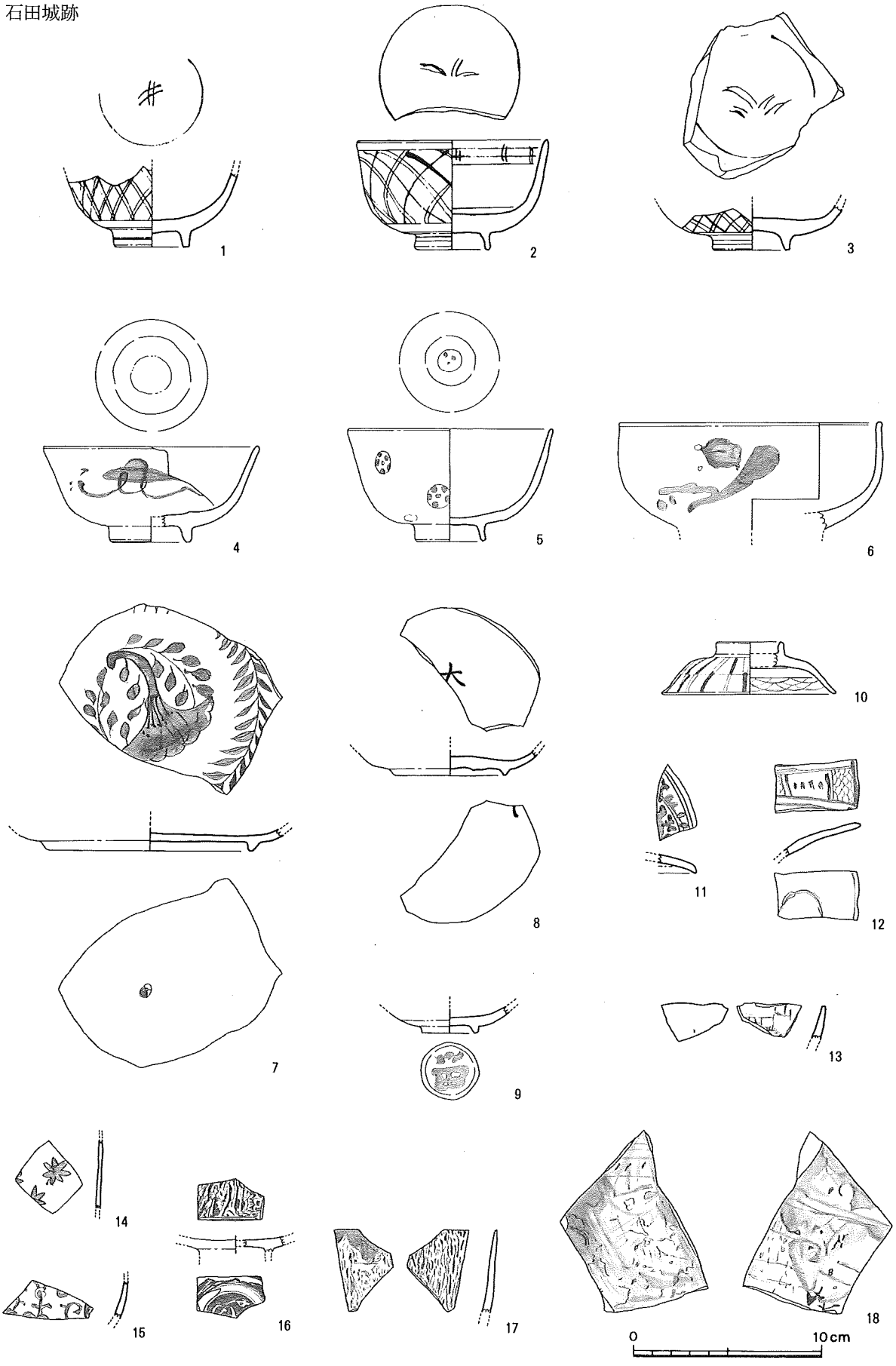
今回の調査では，近世の遺物パンコンテナ2箱分が出土した。遺物の種類としては，近世陶磁器と瓦が大部分であったが，銭も5点出土した。各トレンチごとの遺物の出土状況は以下のとおりである。

第1トレンチ　近世陶磁器（1，7，22，24），瓦，古銭（3）
第2トレンチ　近世陶磁器（6，18，19，20，23），瓦，古銭（4）
第3トレンチ　近世陶磁器，瓦
第4トレンチ　近世陶磁器（11，13，16，17），瓦（2），古銭（5）
第5トレンチ　近世陶磁器，瓦
第6トレンチ　近世陶磁器（2，3，4，5，9，10，12，20），瓦
第7トレンチ　近世陶磁器，瓦
第8トレンチ　近世陶磁器（8，14，15，21），瓦（1，5），古銭（2）
第9トレンチ　近世陶磁器，瓦
第11トレンチ　近世陶磁器，瓦（3，4）
第12トレンチ　古銭（1）

① 国産陶磁器（第17図）

碗（1～6，9，16，17）

1～5は波佐見焼である。1は外面全体に二重斜格子文を染め付ける。見込には袈裟襷文と一条の圏線を持つ。高台及び高台脇にも一条ずつの圏線がある。全体的に焼成が悪いため灰桃色を呈し，全面にピンホールがある。畳付部分のみ露胎である。2は外面が一見二重斜格子文のように見えるが，よく見ると線が一重と二重と交互になっている。内側縁面には三条の圏線に縦線がクロスする縁文様を持ち，見込中央部には一条の圏線の中に草花文を持つ。高台には二条の圏線，高台脇には一条の圏線がある。胎土は粒子も細かく白色で，焼成は普通で堅緻である。全面にやや青っぽい白色の釉がかかっており，釉をふき取った畳付部分には砂が付着している。底部中央が1.1cmと分厚い。3は外面，見込，高台付近の文様及び胎土の状態，焼成の具合ともに2とほぼ同じである。ただ，全面にかかる釉は白色で，底部は6㎜と薄いが，全体的にみると3の方が作りは雑である。4は端反碗である。外面には宝文（笠）が描かれている。見込に蛇の目釉はぎがみられる。胎土，焼成ともに普通で堅緻である。見込中央部と畳付以外の部分にやや青っぽい白色の釉がかかっている。5は外面は丸に梅鉢文が描かれる。見込中心部には，外面の文様の省略と思われる文様がある。また，見込み蛇の目釉はぎがみられる。胎土，焼成ともに普通で堅緻であり，磁器の碗の中ではもっとも薄い作りで，底部は約3㎜である。6は産地不明である。全面に暗い灰色の釉が薄くかけられている。胎土は灰色で焼成は普通で堅緻である。出土した碗の中ではもっとも大きい。9は京風陶器の碗である。高台が小さく，高台内部には墨書がみられるが，文字については「留」あるいは「油」ではないかと思われるが断定はしかねる。胎土，焼成とも普通である。16と17は現川焼である。16は底部であるが，見込と高台内



第16図　緊急発掘調査出土遺物①（国産陶磁器）〔Ｓ＝１／３〕

部に打刷毛目が施されている。胎土は濃い茶色で，焼成はよく堅緻で磁器質である。17は口縁部であるが，外面と見込に打刷毛目が施されている。胎土は赤茶色で焼成は普通である。

皿（7，8，12，13）

いずれも肥前の磁器であるが産地は特定できない。7は染付銀杏文皿である。胎土は白色，焼成は普通で堅緻である。高台内にハリ支えがみられる。8は第7図11と同じものである。全面に青っぽい白色の釉がかけられ，見込に「大」の文字が，高台内に蛇の目釉はぎがみられる。胎土は灰色，焼成は普通で堅緻だが作りは雑である。12は有田焼の染付芙蓉手皿の口縁部である。胎土は白色，焼成は普通で堅緻である。13は染付輪花皿の口縁部である。胎土は白色，焼成は普通で堅緻，全面にかかる白色の釉には艶がある。

蓋（10，11）

どちらも肥前の磁器である。10は波佐見焼の染付端反蓋である。胎土は白色，焼成は普通で堅緻である。青っぽい白色の釉は艶があるが，呉須の発色は悪い。11は染付蓋である。白色の釉がかけられているが，口唇部は無釉である。

甕（18）

唐津焼の灰釉の甕の胴部である。胎土の締まりが悪いため膨らみ亀裂が生じている。

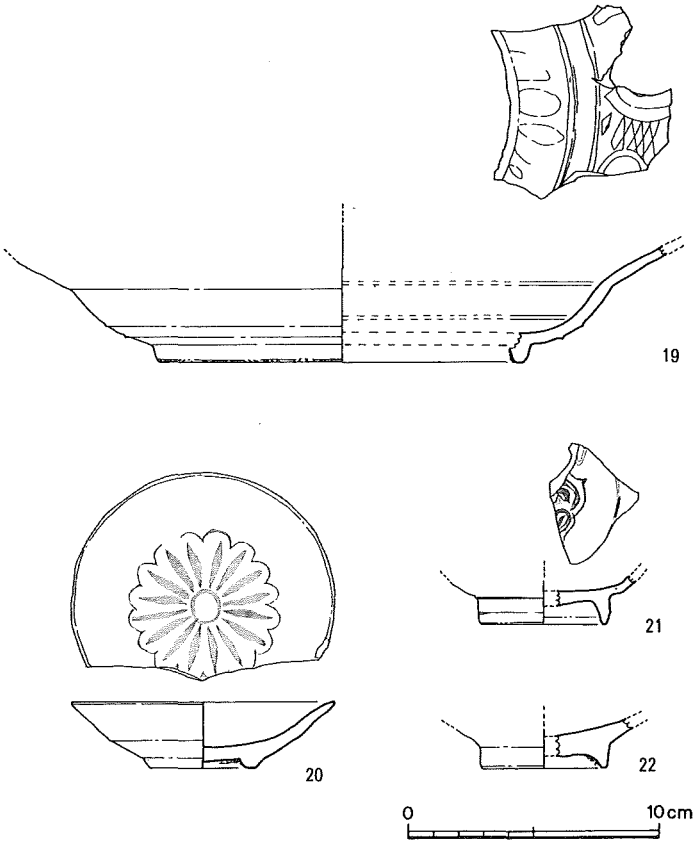
小片（14，15）

器形は不明であるが，どちらも柿右衛門の染付である。14は外面に紅葉を染め付ける。胎土は白色，厚さは1.5㎜，堅緻で呉須の発色も良好である。15は内面に唐草文を染め付ける。胎土は白色で厚さは2㎜，堅緻で呉須の発色も良好である。

② 輸入陶磁器(第18図)

碗（21，22）

21は朝鮮製の茶碗の底部である。高台の形は筒形で高台脇からやや狭くなる状態で形成される。高台内には渦巻状にえぐりとられ，その上に施釉されている。畳付も施釉され砂が付着している。胎土は灰白色で釉は青みを帯びている。22は中国南部の染付の底部である。見込文様を持ち，高台に二条の圏線を持つ。胎土



第17図　緊急発掘調査出土遺物②（輸入陶磁器）〔S＝1/3〕

は白色で，やや青っぽい白色の釉が畳付以外の部分にかけられ，呉須の発色も良好である。

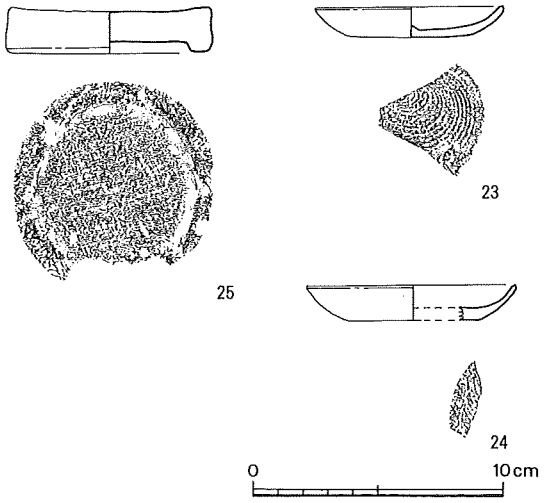
皿（19，20）

19は呉須赤絵の大皿である。内面に赤絵で文様が描かれているが，色が抜けており判別はできない。灰色ぎみの釉が全面にかかり，畳付及び高台内側に砂が付着している。20は朝鮮製の青磁小皿である。見込に菊花文がある。高台は低く高台脇から狭くなる状態で形成される。畳付には砂の付着はなく，高台内側にのみ付着しているため，畳付の砂と釉はこすり取ったものと思われる。胎土は白色，焼成もよく堅緻である。

③　土器（第19図）

皿（23，24）

土師質の小皿である。手塩皿あるいは燈明皿であると思われる。23は底部は糸切り底であるが粗末な作りで焼成も悪い。24は底部は糸切り底で，口唇部はシャープで焼成も良である。



第18図　緊急発掘調査出土遺物③（土器）〔Ｓ＝１/３〕

蓋（25）

焼塩壺の蓋である。逆凹状の断面を持つ板作り方によるタイプである。

④　瓦（第20図）

第１～９・11トレンチから出土し，とくに第８・11トレンチには集中出土地域がみられた。瓦の種類としては，軒丸瓦，軒平瓦，軒桟瓦，平瓦等がある。以下は，遺存状況のいいもの５点を図化した。

軒丸瓦（１）

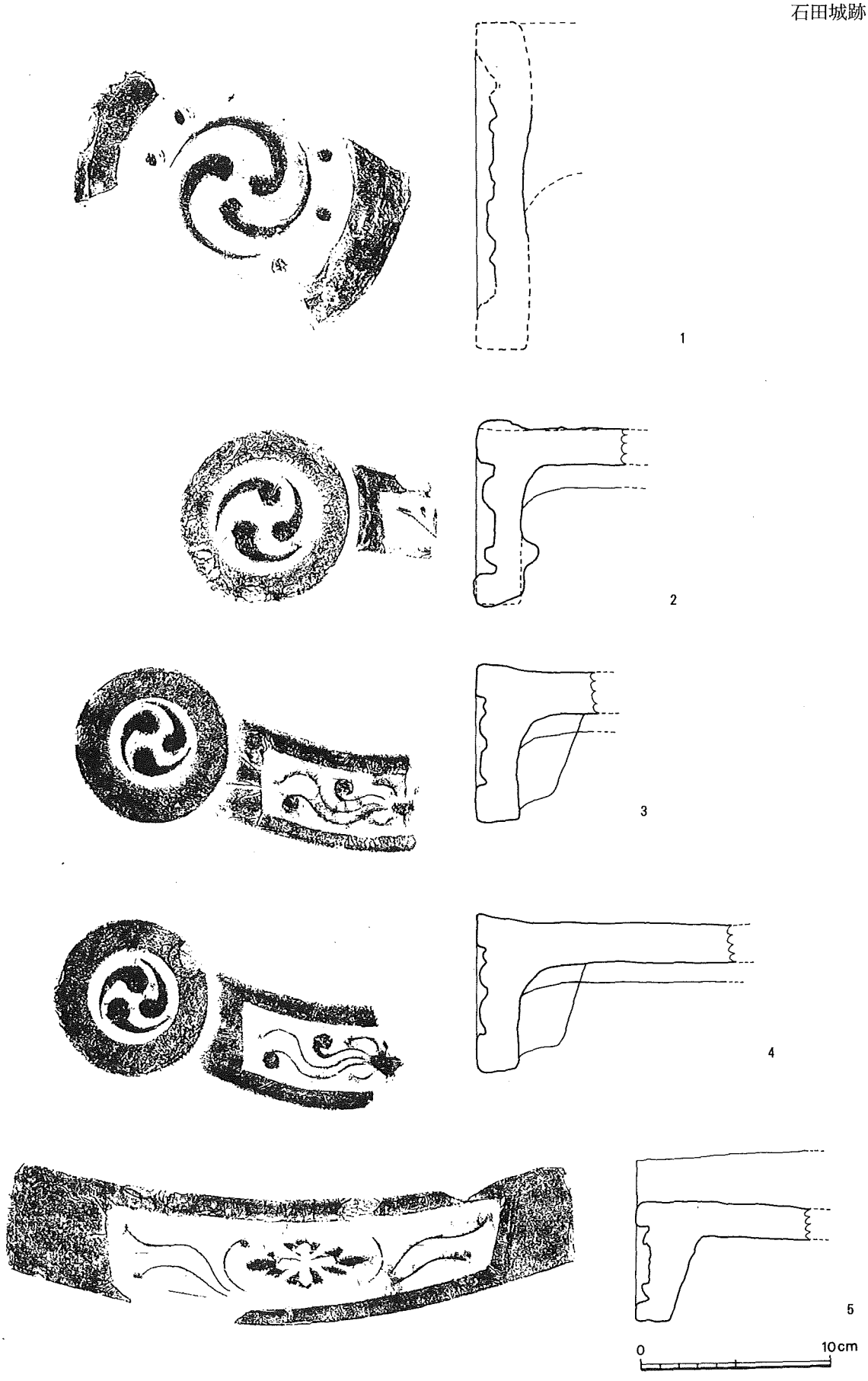
右巻三巴文で，欠損しているが10個の連珠を有すると思われる。巴の尾は離れており，径約17cmと大型だが，胎土の締まりが悪いため膨らみ亀裂が生じている。

軒桟瓦（２，３，４）

３点ともほぼ同じタイプである。丸瓦部の瓦当は右巻三巴文で，連珠はなく巴の尾は太く短く離れており，平瓦部の瓦当は均正唐草文となっている。全体にキラコの付着が確認される。また，丸瓦部には瓦を固定するための漆喰の付着がみられる。全体的に焼成は悪く，中心部分に生焼を残している。

軒平瓦（５）

中心に五島家の家紋である花菱を持ち，その両側に簡素化された端部に返りを持たない唐草文が描かれている。外区の長さ30cmと大型でしっかりした作りであり，焼成もよく堅緻である。



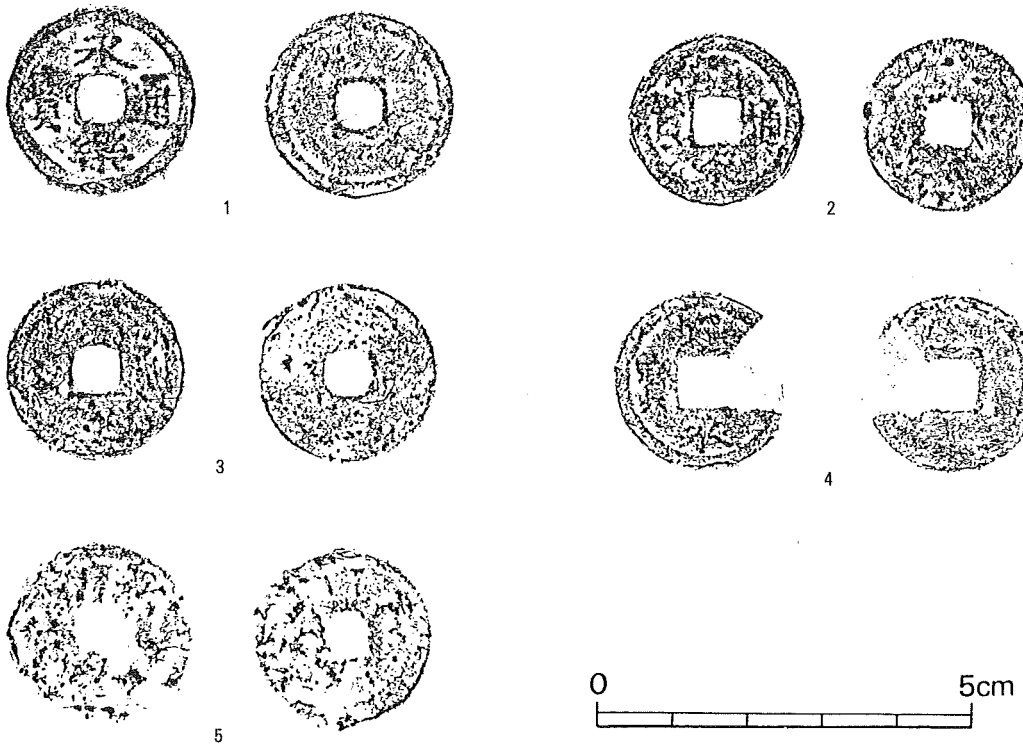
第19図　緊急発掘調査出土遺物④（瓦）〔S＝1/3〕

⑤　古銭（第21図　1～5）

古銭は全部で5点出土している。内訳は永楽通宝1点と寛永通宝4点である。

第4表　出土古銭一覧表

No.	出土トレンチ	銭貨名	径（cm）	備　　考
1	第12トレンチ	永楽通宝	2.55	初鋳　明　1408
2	第8トレンチ	寛永通宝	2.45	初鋳　1668
3	第1トレンチ	寛永通宝	2.35	
4	第2トレンチ	寛永通宝	2.40	
5	第4トレンチ	寛永通宝	2.35	



第20図　緊急発掘調査出土遺物⑤（古銭）〔S＝1/1〕

《参考文献》

宮崎貴夫編　1995「万才町遺跡」『長崎県文化財調査報告書第123集』長崎県教育委員会

扇浦正義・高田美由紀　1996「万才町遺跡」長崎市埋蔵文化財調査協議会

福田一志　1984　岩下遺跡「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」『長崎県文化財調査報告書第69集』長崎県教育委員会

長崎県窯業試験場　1982「波佐見古陶磁文様集」肥前波佐見焼振興会

渡辺誠　1985「物資の流れ―江戸の焼塩壷―」『季刊考古学第13号』雄山閣出版株式会社

1991「肥前の色絵―その始まりと変遷」佐賀県立九州陶磁文化館

1984「北海道から沖縄まで　国内出土の肥前陶磁」佐賀県立九州陶磁文化館
永竹威　1980「日本やきもの集成」平凡社
坪井利弘　1987「桟瓦屋根のデザイン　改題・改訂版」理工学社
坪井利弘　1986「図鑑屋根瓦　改訂版」理工学社
坪井利弘　1976「日本の屋根瓦」理工学社
福田一志　1995「桟原城跡調査報告書」『厳原町文化財調査報告書第4集』厳原町教育委員会
下中邦彦　1984「やきもの事典」平凡社
高野晋司　1995「金石城」『厳原町文化財調査報告書第3集』厳原町教育委員会
永松実編　1992「長崎家庭裁判所敷地埋蔵文化財発掘調査報告書」長崎市教育委員会
永松実・扇浦正義・高田美由紀　1992「朝日新聞社長崎支局敷地埋蔵文化財発掘調査報告書」長崎市埋蔵文化財調査協議会
永松実・扇浦正義・高田美由紀　1993「銅座町遺跡」長崎市埋蔵文化財調査協議会
永松実・扇浦正義・高田美由紀　1993「栄町遺跡」長崎市埋蔵文化財調査協議会

IV　ま と め

今回の調査の目的の一つに絵図面等の文献資料と考古学資料の整合性の確認ということがあった。本遺跡は歴史的に見れば近世末という新しい時代の建築物の跡であるため，絵図面の信憑性は高いことが期待できた。二の丸部分については，グランドとして利用されていたため，損壊が激しいものの『旧五嶋領ノ図』に記載された「〆切門跡」,「荷上門跡」やそれに付随する石垣の基礎部分が確認でき，絵図面の正確さが裏づけられた。本丸部分については建築物が何度も建て替えられていたため，現校舎部分は完全に破壊されており，その他の部分も以前の校舎の基礎や廃材，集水施設などのため損壊が著しかった。そのため，礎石と思われる石列が確認されたが前後の関係がわからず絵図面のどこにあたるのかは断定できなかった。

出土遺物については，近世陶磁器と瓦が大部分を占めた。陶磁器は出土量も少なく，肥前産の日用雑器が多かった。これは，城として営まれた期間が短く，明治維新後，陸軍省の管轄になった後，上質品をはじめ使用可能な陶磁器類は，速やかに運び出されたためと思われる。また製作年代は17世紀後半～18世紀前半のものが多く(註１)，築城の時期とはかなりの開きがみられたのは意外な感じであった。瓦は延宝６年（1678）に完成した対馬棧原城（註２）跡出土のものと比較してもかなり大きく，平均して軒丸瓦の径は棧原城出土分が約15cmに対して本遺跡出土分が約17cm，軒平瓦の外区の長さは前者が約27cmに対して後者が約30cmである。また，沖城跡・玖島城跡といった近世初頭の城跡や，万才町遺跡・桜町遺跡といった近世長崎の屋敷跡出土分と比べても大型である。ただし，本遺跡出土の瓦は家紋入りの瓦など良質品もあるものの，ほとんどが焼成は悪く笵も弱い。時代を経るにつれ近世瓦は大型化していく傾向にあるわけだが(註３)，五島藩は厳しい財政事情のなか建築費削減のためあるいは築城を急ぐため瓦を大型化することで全体の枚数を減らそうとし，その結果，質の悪い製品が生産されたのではないだろうか。

本城の特徴は「築城が海防を目的としていることから，石火矢台場が各郭の隅の要所要所に配置されている」(註４)といわれている。たしかに城内には６カ所，本丸部分だけでも３カ所の石火矢台場がある。近世の城の役割が「戦乱に備える目的は消滅し，あるいは消滅させられ，大名の住居，政庁としての機能へと転換」(註５)していることからすると近世の城としては異常ともいえる。つまり本城は近世的な役割からいうと城というより台場であり，台場の中に五島氏の住居と五島藩の政庁があったといえよう。戦闘となれば最後の砦ではなく最初の戦場となる可能性の強い台場と化してまでも築城を優先したことは，何にもまして城を持ちたいという五島藩の悲願が非常に強かったことを伺うことができる。

《註》

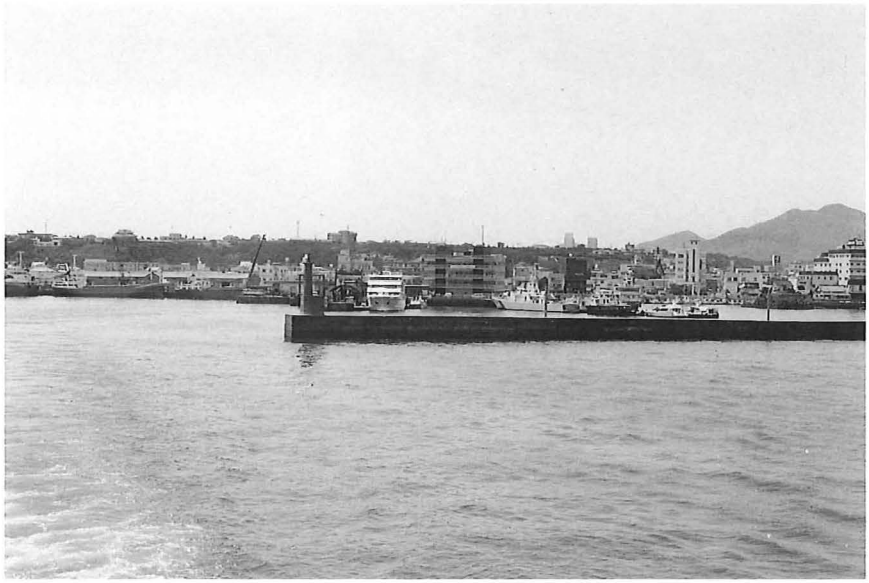
註１　下川達彌氏ご教授による
註２　福田一志1995「棧原城跡調査報告書」『厳原町文化財調査報告書第４集』厳原町教育委員会
註３　東貴之氏ご教授による
註４　平山猛夫1975「福江城」『日本城郭大系17　長崎・佐賀』人物往来社
註５　井上宗和1992「近世大名の城」『日本の城の基礎知識』雄山閣

第5表　幕末略年表

西暦	元号	主な出来事	築城関係
1806	文化3		**五島盛運が幕府に築城許可を請願**
1808	5	フェートン号事件	
1820	文政3		**五島盛繁が幕府に築城許可を再請願**
1825	8	異国船打払令	
1840	天保11	高島秋帆が「西洋砲術意見書」提出	
		アヘン戦争（～42）	
1841	12	徳川斉昭が大砲鋳造	
1842	13	高島秋帆に砲術教授許可	
1844	弘化元	仏船が琉球来航	
1845	2	英船が長崎に来航	
1846	3	英船・仏船が長崎に来航	
1847	4	関東沿岸海防強化	
		蘭船が長崎に来航し開国要求	
1848	嘉永元	外国船が松前・津軽・琉球などに来航	
		佐久間象山が大砲鋳造	
1849	2	英測量船が浦賀に来航し東京湾測量	**五島盛成が幕府に築城許可を三度請願**
			石田城・松前城築城着工
1850	3	蘭船が長崎に来航　佐賀藩が反射炉築造	
1851	4	米船が中浜万次郎らを護送し琉球に来航	
1852	5	英船が琉球来航　露船が下田に来航	
1853	6	ペリーが浦賀に来航し久里浜に上陸	品川台場築造
		プチャーチンが長崎に来航	
		大船建造解禁	
1854	安政元	ペリーが再来航　日米和親条約締結	松前城完成
		日英和親条約締結　日露和親条約締結	
		韮山と鹿児島に反射炉築造	
1855	2	洋式小銃製作決定　海軍伝習所設立	
		日仏和親条約締結	
1856	3	老中堀田正睦が外国御用取扱	
1857	4	軍艦教授所設立　下田条約締結	五稜郭着工
		長崎に製鉄所設立	
1858	5	米・蘭・露・英・仏と修好通商条約締結	
		外国奉行設置　安政の大獄（～59）	
1859	6	横浜・長崎・函館の開港	
1860	万延元	咸臨丸が太平洋横断　桜田門外の変	
1861	文久元	露軍艦が対馬に来航	
1862	2	生麦事件	
1863	3	長州藩が下関で外国船砲撃　薩英戦争	**石田城完成**
1864	元治元	禁門の変　四国連合艦隊が下関を砲撃	五稜郭完成
		第一次長州戦争	
1865	慶応元	横須賀に製鉄所設立	
1866	2	薩長同盟　第二次長州戦争	
1867	3	外国総奉行設置　大政奉還	
1868	明治元	戊辰戦争（～69）　江戸城開城　明治改元	

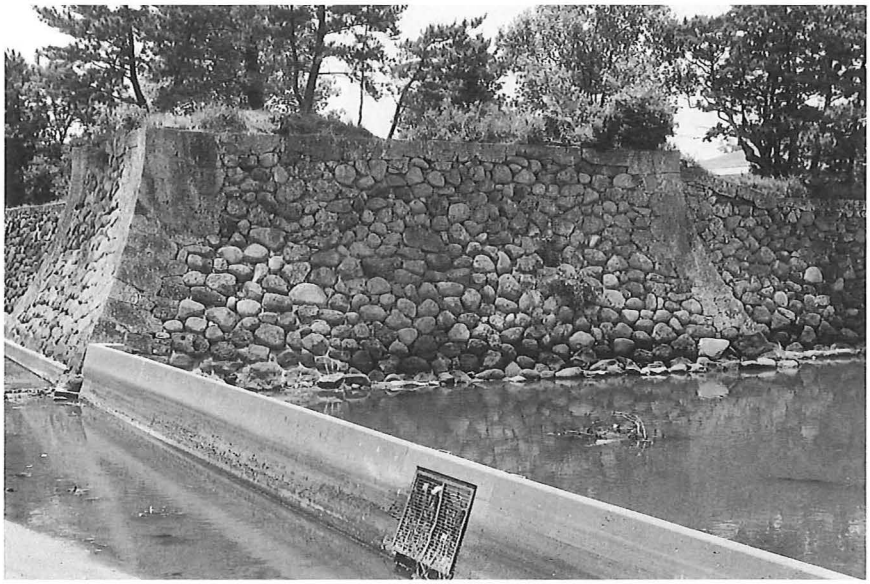
図　　版

図版１　石田城近景



石田城跡遠景

石田城跡東側石垣



石田城台場跡

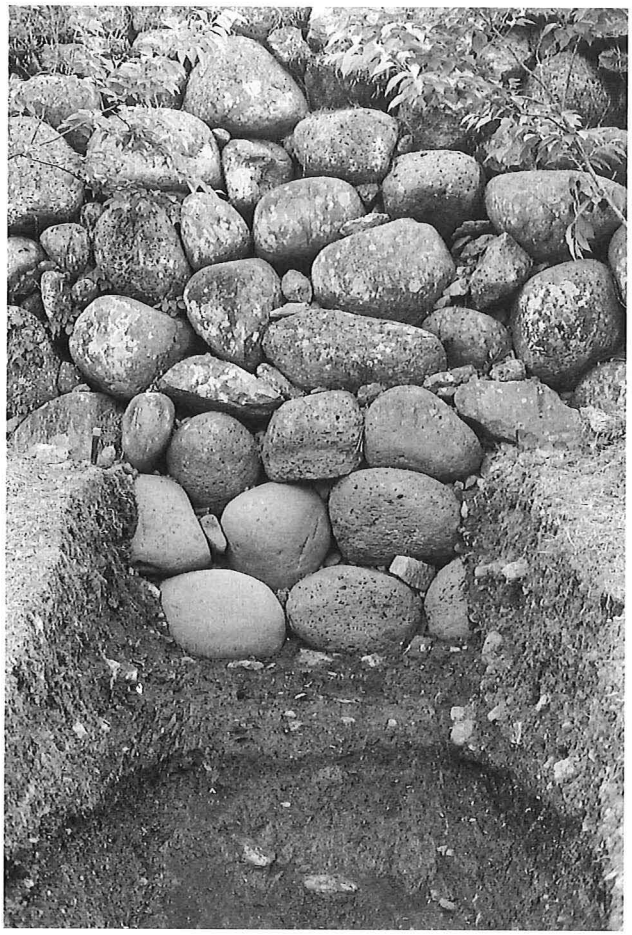
図版 2　石田城跡遠景等

本丸（TP14）調査風景

二の丸調査風景

TP 1 発掘状況
（戦後の砂場跡）

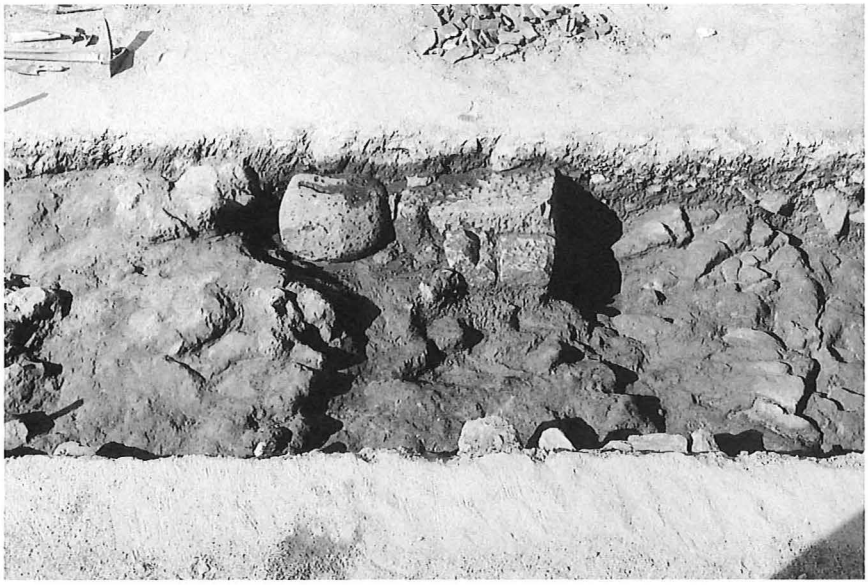
図版 3　範囲確認調査状況①



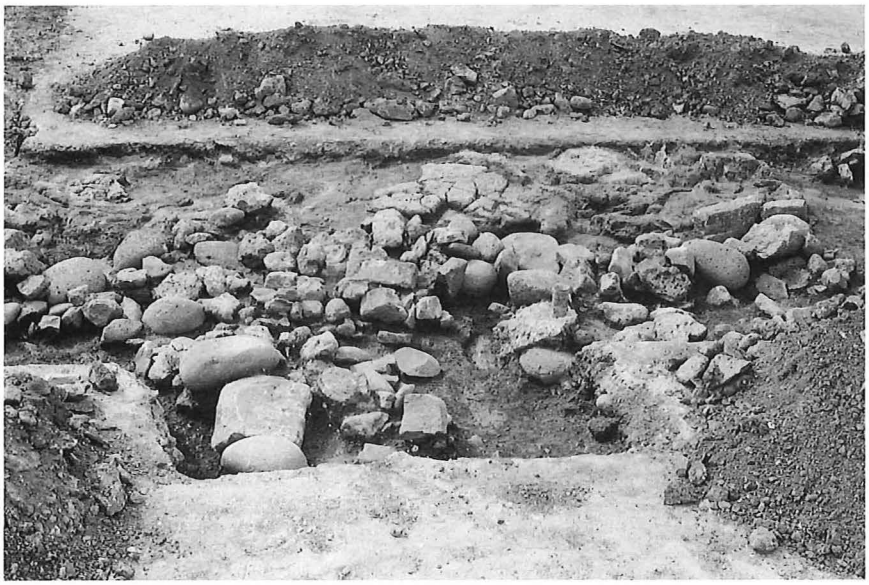
TP 1発掘状況
石垣基礎部

TP 1南壁土層

図版 4　範囲確認調査状況②（TP 1の状況）



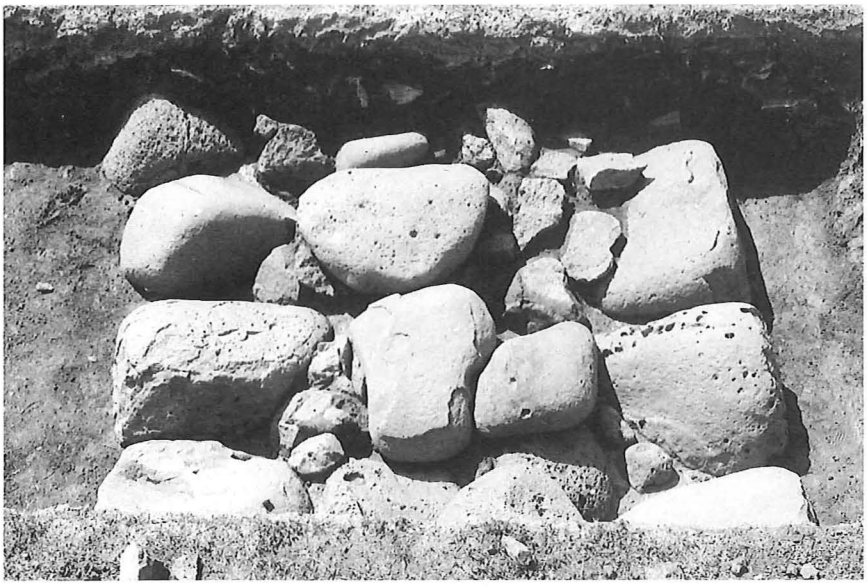
TP 5 発掘状況
(石垣基礎残存)



TP 8 発掘状況
(石垣基礎残存部)

TP 5 発掘状況
(〆切門跡)

図版 5　範囲確認調査状況③（二の丸遺構検出状況）

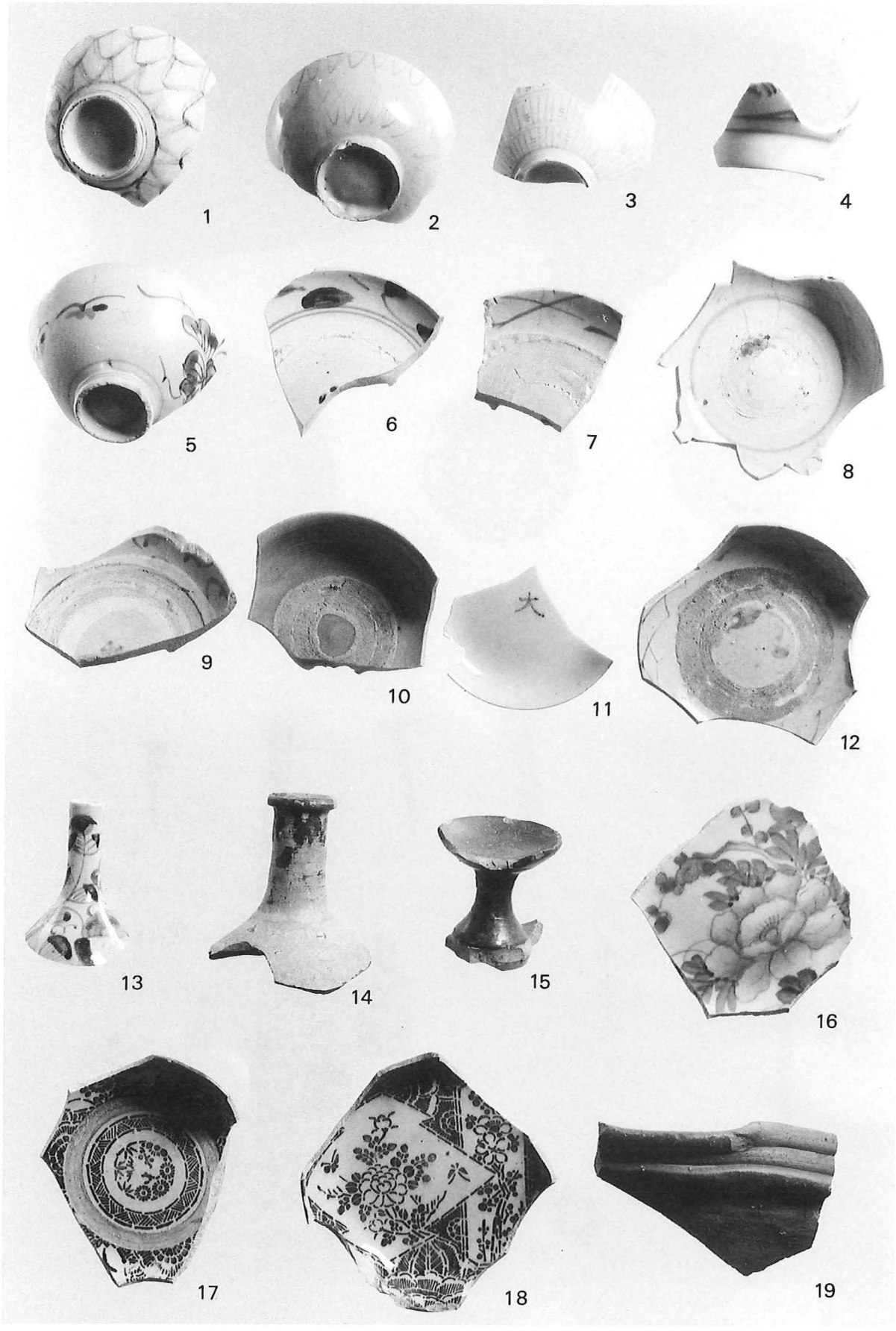


TP 4 石垣基礎部分

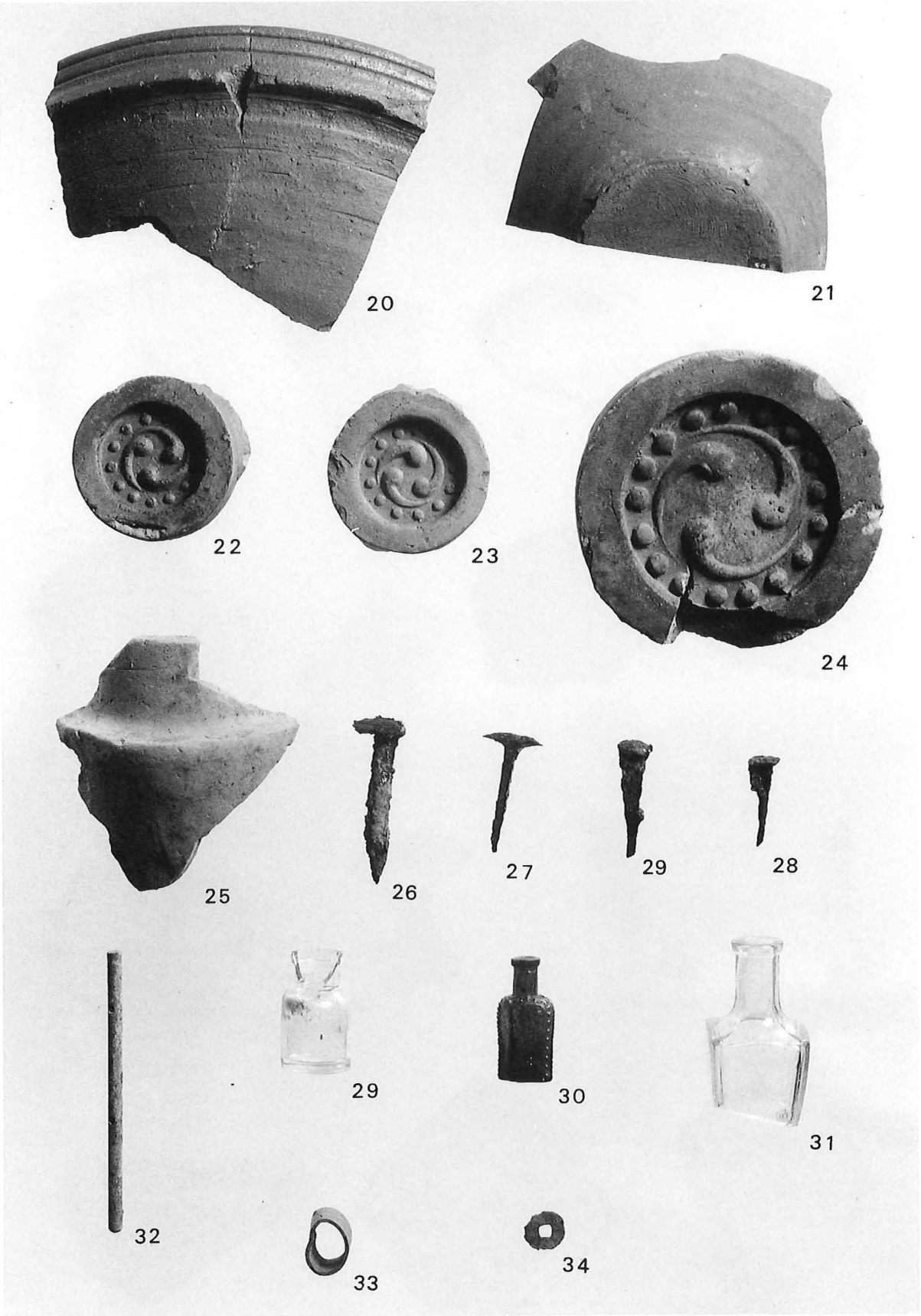
TP14遺構検出状況
(排水路跡)

TP 6 発掘状況
(玄武岩の基盤層)

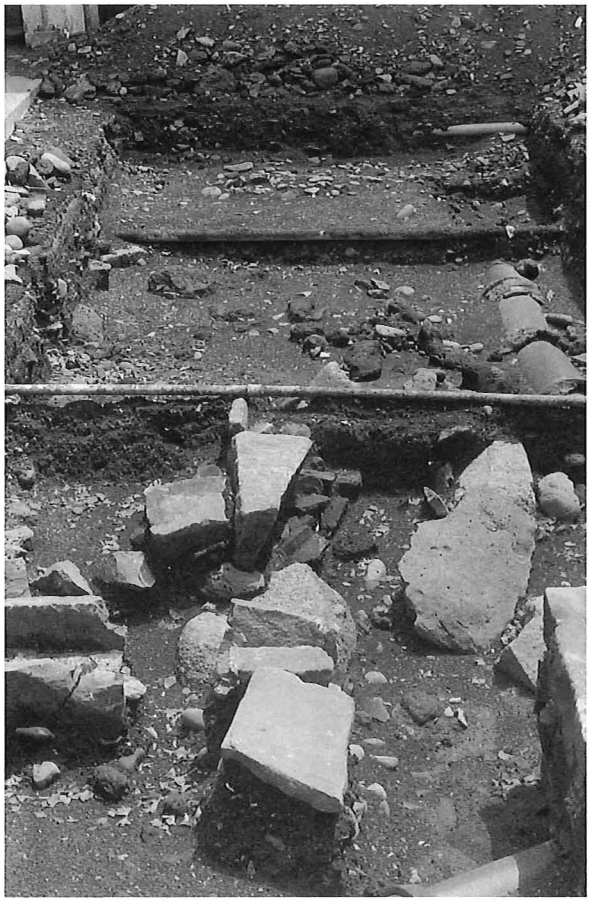
図版 6　範囲確認調査状況④（本丸・二の丸遺構検出状況等）



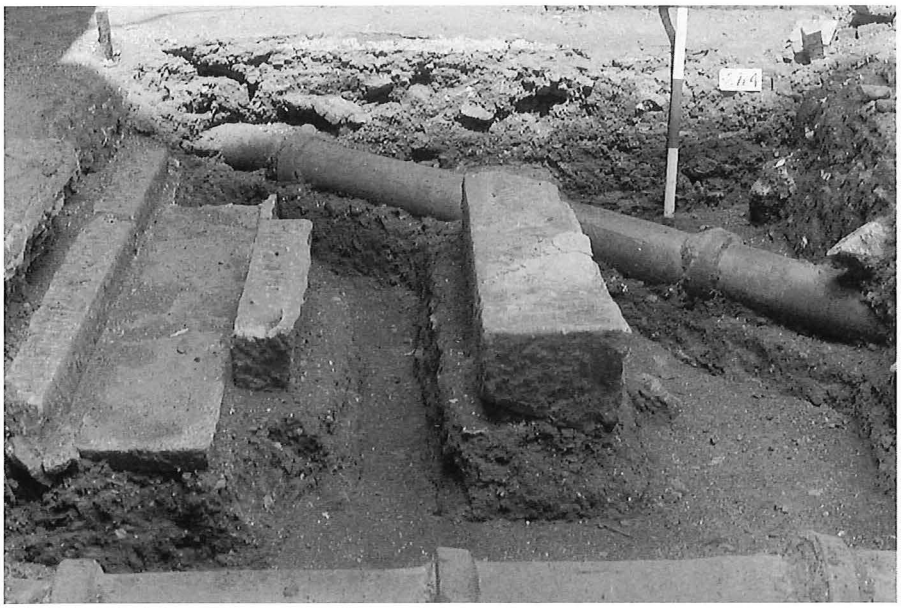
図版 7　範囲確認調査出土遺物① ［S＝1／3］



図版 8　範囲確認調査出土遺物② ［S＝1／3］



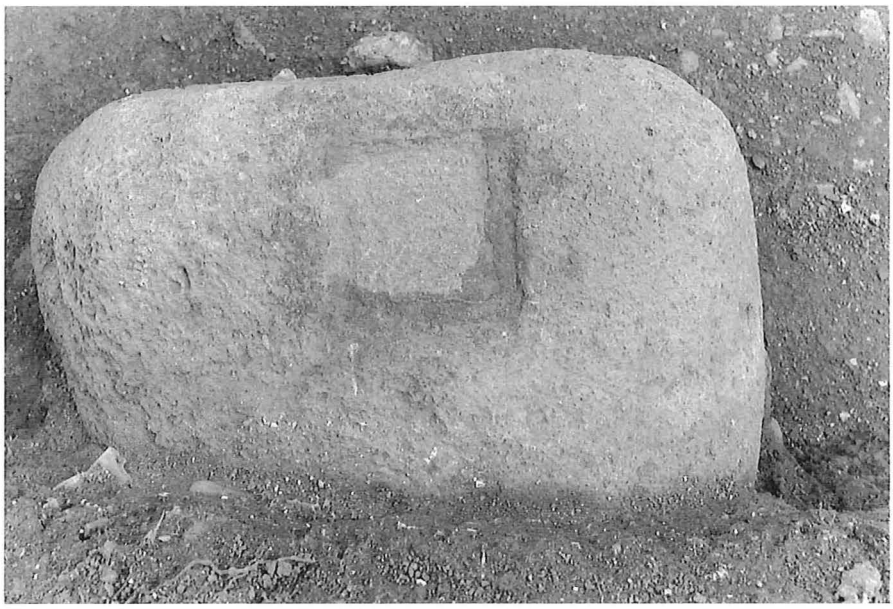
第１トレンチ発掘状況
（手前左が排水溝跡）



第４トレンチ発掘状況
（左が排水溝跡）

図版 9　緊急発掘調査状況①

第3トレンチ
発掘状況



柱跡のある礎石

図版10　緊急発掘調査状況②

衛生看護棟裏の
発掘状況

第８トレンチ
発掘状況

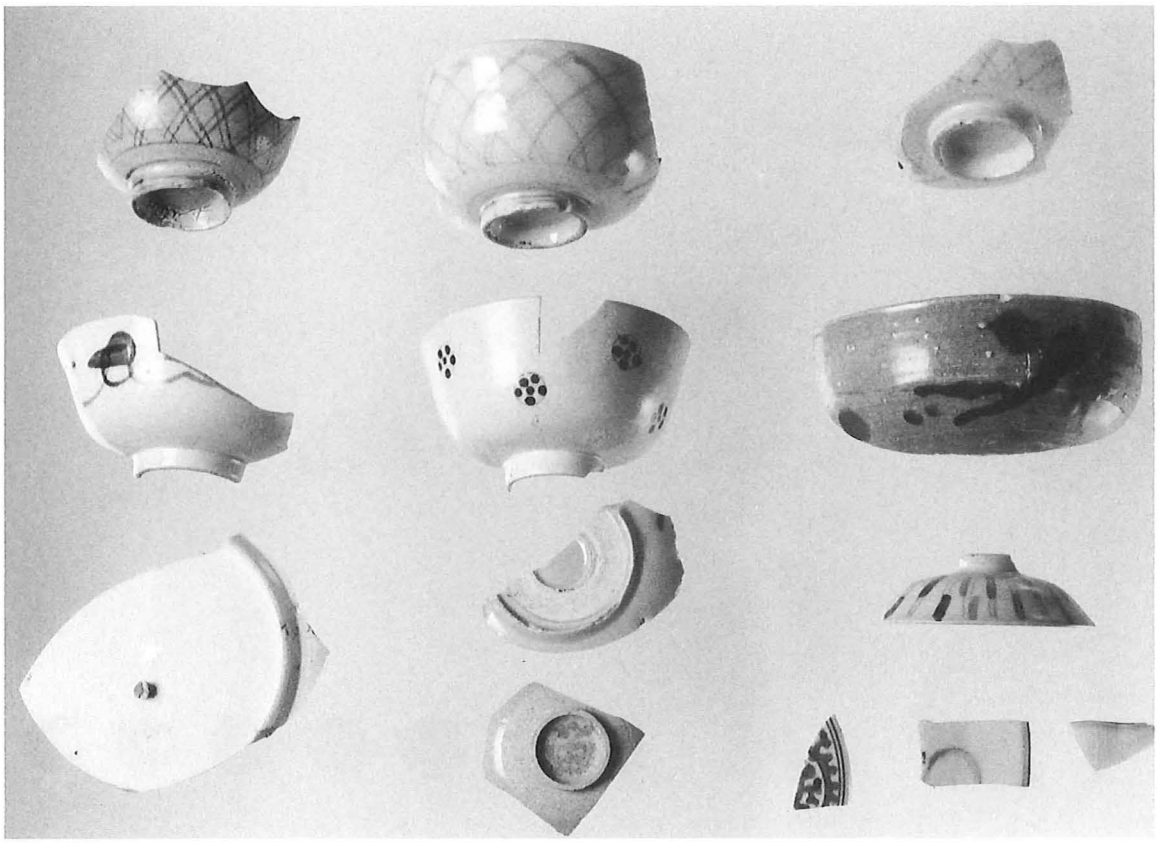
第８トレンチ
発掘状況

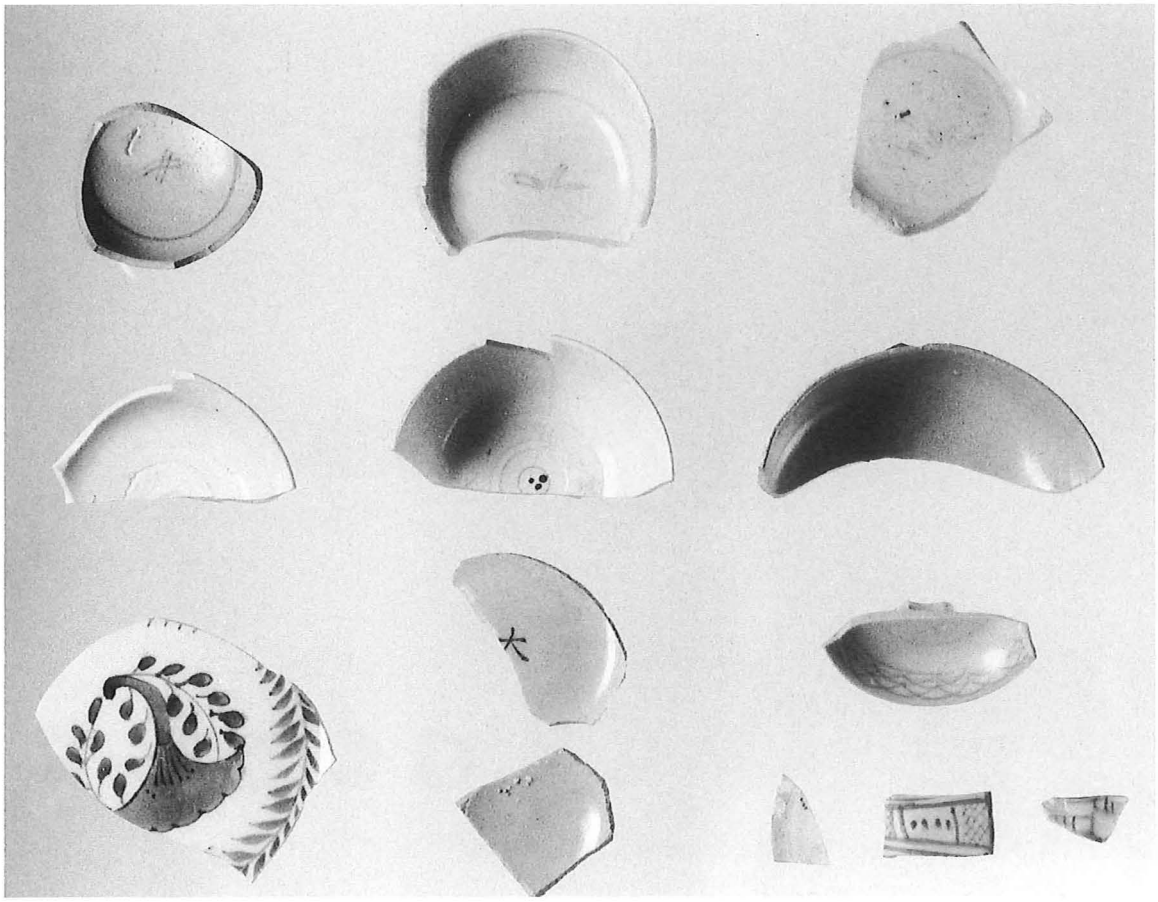
図版11　緊急発掘調査状況③

第11トレンチ
発掘状況

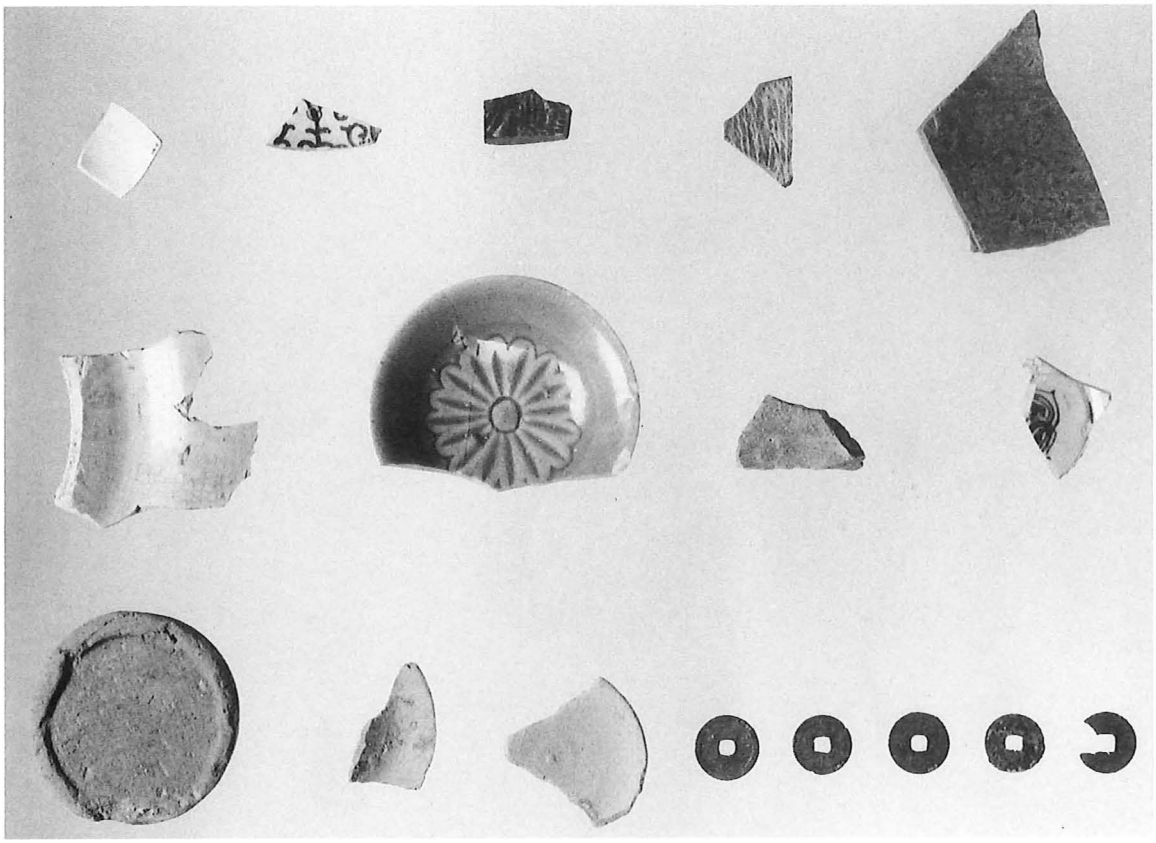
埋めもどし風景

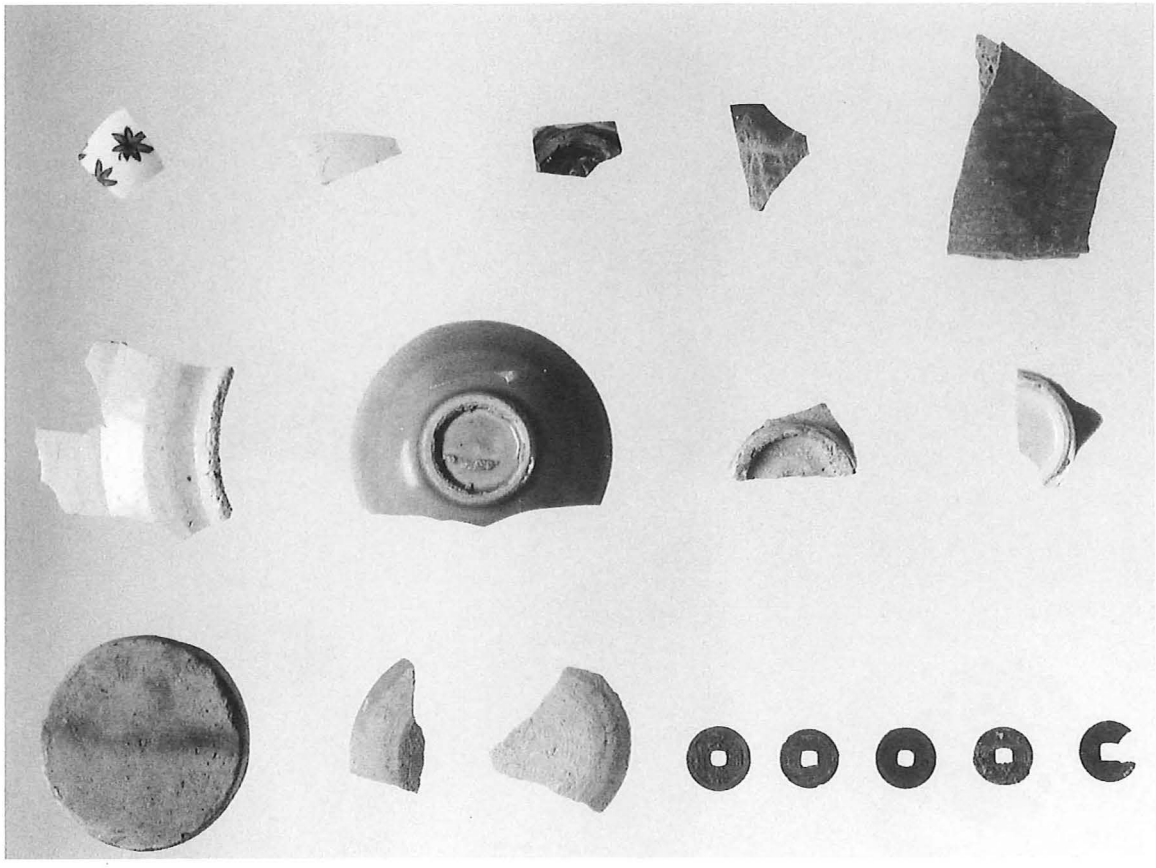
図版12　緊急発掘調査状況④



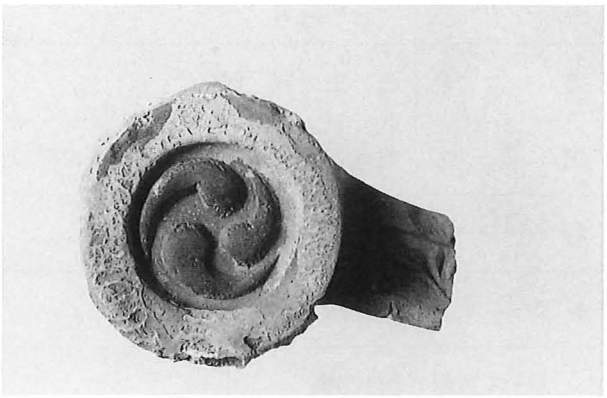


図版13　緊急発掘調査出土遺物①［S＝1／3］





図版14　緊急発掘調査出土遺物②［S＝1／3］



図版15　緊急発掘調査出土遺物③（瓦）［S＝1／3］

報告書抄録

ふりがな	いしだじょうあと
書名	石田城跡
副書名	県立五島高等学校立替工事に伴う発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第139集
編著者名	藤田 和裕・村川 逸朗・甲斐田 彰
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850長崎県長崎市江戸町2－13　TEL(095)824-1111
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
石田城跡（いしだじょうあと）	長崎県福江市（ながさきけんふくえし）	42206	047	32 41 30	128 51 00	19950515 ～ 19950607 19960722 ～ 19960830	251 300	学校立替 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石田城跡	城跡	近世	石垣の基礎 石垣の抜き取り跡 荷上門跡 〆切門跡 排水路跡 建物礎石	近世陶磁器 輸入陶磁器 すり鉢 瓦 古銭 鉄鋌	

長崎県文化財調査報告書第139集

石田城跡

1997

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷